
先生。

ジェレミー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先生。

【Nコード】

N5174D

【作者名】

ジェレミー

【あらすじ】

仕事が生き甲斐の夫は帰りが遅く、いつもどこかで孤独を感じている主婦はるか。

治療がきっかけで気になった、歯科医師・前田。

心では、夫を愛して疑わないと解っているながら、前田の優しさに魅かれていく。

様々な葛藤、心の変化を描く。

先生との出会い。

「はるか、予約は何時？」

職場に着て行く服を選びながら、和晃が私に聞いた。

「12時半。11時半過ぎのバスに乗って行くつもり。あー・・・行きたくないなあ・・・」

「ちゃんと診てもらって、しっかり治療するんだよ」
「んー・・・」

ここ半年くらい、冷たいものが左上の頬に沁みていた。歯医者さんに、異常なくらいのトラウマと恐怖心がある私は、いよいよ我慢できなくなるまで、歯医者さんに行くのを躊躇していた。

虫歯なら、放っておけば確実にひどくなっていく・・・。
行きたくない。でも、ひどくなるのも嫌。

そんな葛藤と闘っていると、和晃が「良いところだから」と紹介してくれた歯科クリニックに、予約を入れたのが1週間前。今日は、その予約の日だ。

「行ってきます」

「いつてらっしゃい、気をつけてね。」

支度を整えた和晃が、いつもの時間に出掛けて行った。

洗濯物を干し終えて、遅めの朝食を摂り、私も出掛ける準備をする。

クリニックは、市内ではNO.1と謳われるほど有名で、駅前のオフィス街の中の、大きなビルの5階にある。22時まで診療を受け付けていて、夜遅くまで働くOLやビジネスマンに人気らしい。ー

般歯科、小児歯科以外に、ホワイトニング、無痛レーザー治療、審美歯科、インプラント、スポーツ歯科まで、最先端技術を取り入れていることでも知られている。

駅前へ向かうバスの中でも、治療への不安に駆られて心臓がドキドキしていた。

オフィス街の銀杏並木の歩道を歩き、ビルに入りエレベーターを探す。入り口にはコーヒESHOPP、向かいには航空会社、ビルの最上階にはフレンチレストランもあり、おしゃれに働くには理想的なビルだ。

5階に上がると、「クリニックはこちら」という看板が目に入り、矢印の方向へ歩いた。「デンタルクリニック」と書かれたガラス扉を開けると、あの、歯医者特有のにおいが鼻を突いた。入って右側に受付があり、そこから女性に声をかけられた。

「こんにちは、ご予約でしょうか？」

「はい・・・」

「ご予約のお名前をよろしいですか？」

「春日部です」

「春日部様ですね・・・」

受付の女性はパソコンで予約確認をしている。

クリニックは、私の「歯医者さん」のイメージとはまるで違い、内装がとても綺麗で、どこかエステサロンのようだ。待合室のソファはふかふかで、ソファアの正面の大きな液晶テレビでは、洋画のDVDが流れている。

「春日部様、問診表にご記入をお願いします。」

受付の女性にペンを渡され、痛みの症状を書いていく。書いている間も、心臓はドキドキしたままだった。ソファアに座り、名前が呼

ばれるのを待つ。

顔も目も、洋画の流れるテレビを向いているが、見ているようで見
ていない。内容は全く頭に入ってこなかった。

診療室に入るガラス扉が開き、50代くらいの助手らしき女性が出
てきて、カルテを見ながら名前を呼んだ。

「春日部さまー・・・」

心臓のドキドキはさらに高まる。

「はい・・・」と返事をし、助手に促され奥へ入っていく。

入るとすぐ左側に、若い男性医師が笑顔を向けて立っている。身長
はそれほど高くない、160cm台だろうか。ブルーのダンガリー
シャツにネクタイ、グレーのスボンに長い白衣を着て、袖は肘まで
しっかりと捲くり、表面の青いマスクのゴムを左耳だけに引っ掛け
ている。

「こんにちは」と医師が挨拶をしてきた。

歯医者が怖い私は、軽く会釈を返したものの、声までは出なかった。

診療室も、待合室同様、綺麗な内装で、設備も充実している。診療
ブースは一箇所ごとに全て仕切りがあり、全ての左上天井には小型
の液晶テレビ、待合室と同じ洋画が流れ、診療中も続きが楽しめる
ようになっていいる。洋画は全て字幕で、ステレオから音が出ている。
歯科診療室でありながら、映画館のような雰囲気だ。思っていた以
上に奥行きもあり、診療ブースは10箇所、その他に、X線室、レ
ーザー治療室もある。

すごい・・・さすが、市内NO.1、オフィス街で人気っただけあ
る・・・。

案内された診療ブースに座って、相変わらずドキドキしながら待つ
ていると、背後から声をかけられた。

「春日部さん、こんにちは。」

さつき入り口で会った男性医師が、ドクター用の椅子に座りながらカルテを持って近づいてきた。私の右側に座ると、

「春日部さんの担当をします、前田です。よろしく。」

と、やはり笑顔で。

「今日は、左上が傷むということですが・・・、痛みはどんな感じ??例えば、噛むと痛いとか、冷たいものとか温かいものが沁みる、甘いものが沁みる・・・とか」

「あ、えーっと・・・冷たいものがすごく沁みます。」

「冷たいものだね。じゃ、ちよつと、診てみようね。シートを倒します」

不思議だった。症状について話したただけなのに、さつきまでのドキドキも、怖さも消えていた。

先生は、口の中を覗き込み、首をかしげている。

「春日部さん、どの辺が痛む?」

「え?どの辺?」

「うん、痛む箇所は虫歯じゃないみたいなんだ」

「どの辺・・・この辺?」

手を、左の頬に当てた。先生は手を当てたところをじつと見つめ

「・・・もう一度診るね。はい、開けてー・・・」

ミラートップを奥まで入れてじつと見ている。

「あー・・・もしかしてここかな??シートを起こすから、一度うがいをしてください」

言われるままにうがいをし、先生を見る。

「春日部さん、最近顔をどこかにぶついたりしなかった?」

「・・・???いいえ・・・」

「そうかー。実はね、沁みている箇所は、ほんの少しなんだけど、歯が欠けているみたいなんだ。」

「欠けてる??」

「うん。いろいろ原因はあるんだけど、よくあることなんです。心配しなくてもいいよ。少し、表面を薄く削って、白いもので被せれば、おそらく大丈夫だと思う。沁みてるから、軽く麻酔をしようね。」

「はい・・・」

丁寧な説明にホッとした。

先生は別の女性医師にいくつか指示をして、他の患者を診に行った。このクリニクには、医師だけで6人、助手に至っては何人いるのかわからないくらい、スタッフも充実している。しかも、平均年齢も若そうだ。まだ30代そこそこといった医師ばかりで、助手も20代の女性が殆どだ。

その日の治療は、前田先生に指示を受けた女性医師が全てを請け負ってくれた。

治療が終わり、診療室を出ようと歩いていくと、背後からまた声をかけられた。

「おつかれさまでした。大丈夫？」

振り返ると前田先生が立っていた。

マスクをして、見えるのは目元だけだが、やはり笑顔だった。

「はい。」

初めて笑顔を返した。

「お大事に。」

会計と次の予約を済ませて、ビルを出た。

前田先生・・・すごく優しい先生・・・。

11月初旬。

さわやかな秋空の下、色づいた銀杏並木の歩道を歩く。

私はまだ、気づいていなかった。

この出会いが

心に、大きな変化をもたらすことを。

笑顔の先生。

和晃とは、19歳の時、アルバイト先の厨房で知り合った。当時、調理師専門学校の生徒だった私は、昼間は学校、夕方からホテルの厨房で働いていた。和晃は私よりも2ヶ月後にアルバイトとして入り、知り合って8ヵ月後に付き合うことになった。和晃は25歳だった。

その頃は、お互いに結婚などは意識していなかったが、付き合ってから1年後に、職場の近くで同棲を始め、4年後結婚した。結婚前に、和晃はホテルを辞め、今の職場に移り、間もなく料理長に就任した。和晃はいつも忙しい。朝8時には出勤して行き、帰宅は毎日深夜に及ぶ。それから夕食を摂るため、ベッドに入るのは3時を回るのが普通だ。

初めは共働きだったが、すれ違いの生活が続いていたため、私は退職し家庭に入ることにした。結婚して1年半、一緒に暮らして6年が過ぎようとしていた。

お風呂上り、洗面台の前で髪にドライヤーを当てながら鏡に映る自分を見た。

鬱陶しい長い髪……。

「ねえ、和晃」

「んー？」

リビングで料理本を見ている和晃が返事をした。

「髪、切ろうかな」

「え？どうして？せっかく長くなったのに」

「元々結婚式の為に伸ばしただけだし、長いのも鬱陶しくて」

「そう？俺は長いほうがいいけどなあ……」

と、料理本を見たまま答える。

結局どっちだつていくせに・・・。
「大変なのは私だもん。切るから」

あの日、歯科クリニックに行ってから、なぜだかおしゃれをしたいと思うようになっていた。ファッション誌を買い、インターネットでヘアカタログを閲覧したりしていた。

翌日、マンションの近くのショッピングモールにある美容室に、予約の電話を入れた。

お昼を済ませてから、自転車でモールに向かう。

11月だというのに、日差しにはまだ暑さを感じる。

美容室の扉を開けると、いつも指名をしている牛嶋さんが、私に気づいて「いらっしやいませ」と声をかけてきた。

「こんにちはー、牛嶋さんお久しぶりです。」

「ホント、久しぶりっすね。」

牛嶋さんは、私と同じ年の美容師さんだ。

「今日はどうします?」

私のバッグを、預かる為に受け取りながら牛嶋さんが尋ねてきた。

「切る。」

「切る。どのくらい??それだけ長ければ自由自在ですよ。」

「このくらい。」

私は自分の首元で手を止めた。

「おっ、結構バツサリいきますね。何かあつたんすか?」

「・・・どうして?」

「女性が髪をそんなにバツサリ切るって、何かあるのかなって思うじゃないっすか。」

「別に何も無いんだけど、もう、鬱陶しくて。」

「そうっすか。」

それ以上は追求してこなかった。

髪を切ってもらいながら、他愛ない会話をした。最近のテレビドラ

マ、人気のお店、公開中の映画。牛嶋さんはおしゃべりではないが、無口でもない。程よい会話で楽しませてくれる。髪は、ボブスタイルに仕上げてくれた。

その日の夜、本当に髪を切った私を見て、和晃はかなり驚いていた。「本当に切っちゃったんだ・・」と、半ば残念そうでもあったが、「ちよつと若くなつたね」と、笑いながら頭をポンポンと撫でていた。

私の頭をポンポンと撫でるのは、付き合う前からの和晃の癖だ。「若くなつたつて、若いんですけど。あなたより6歳も。」と、和晃の手を払いのけた。

数日経つて、2度目の歯科診療の日がやってきた。最初の診療の時から、身支度に時間をかけた。主婦になつてからはそれ程出掛けなくなつたため、久しぶりのおしゃれが楽しく感じていた。バスに乗り、駅前へ向かう。ビルに入り、5階へ。

クリニックの扉を開けると、同じ、特有のにおい。入るとすぐに、前田先生の後ろ姿が視界に飛び込んできた。一瞬、胸がトクンと高鳴るのを感じた。

診療室に入る扉のガラス越しに見える先生は、患者の治療に当たっている。白衣の襟元から、今日は白いワイシャツが見える。マスクのゴムが耳に掛かり、ゴーグルを装着して、キーンという音を立てながら、患者の歯を削っているようだ。足元にはグレーのスポン、これはこの前と同じだ。

受付を済ませてソファに座る。洋画の流れる液晶テレビの方を向いているが、顔の左側で、何気なく前田先生の気配を追ってしまう。受付にいた事務の女性が、診療室にカルテを持っていく。

「13時ご予約の患者様いらっしゃいました。前田先生の担当です。よろしくおねがいします。」

前田先生の「はい」という声が聞こえる。その声に、なぜかまた、胸がトクンと鳴る。

なんでこんなに緊張するんだろう？

私はやっぱり、歯医者さんが怖いんだ。

だから、前田先生を見ると胸がドキドキするんだ。

診療室の扉がガラリと開き、前田先生がカルテを持って出てきた。

「春日部さん」

先生の方を振り向くと、マスク越しの笑顔でこっちを見ている。

思わず、笑顔を返してしまう。

「こんにちは。」

「こんにちは・・・」

「奥の、4番に入ってくれる？」と、先生が4番ブースを指差す。

「はい。」

診療ブースに入って座り、続いて先生も右隣に座る。マスクの左耳のゴムを外し、右耳に引っ掛けたまま、カルテを持った肘を太ももについて、少し前屈みになって尋ねてきた。

「この前のところはどうか？まだ沁みてる？」

「あ、いいえ、もう沁みなくなりました。」

「沁みなくなった？それはよかった。」と、微笑んで言う。「今日は、口の中全体の写真を1枚撮って、検査をしてから、これからの治療計画を立てようね。」

「はい」

「今、気になってるところとかある？」

「んー・・・時々、親不知の歯茎が痛む時があります・・・」

「うんうん、親不知か・・・」先生は、頷きながらカルテにペンを走らせる。「それじゃ、とりあえず写真から撮ろう」

前田先生が助手の女の子に指示を出し、X線室に案内され、写真を撮る。4番ブースに戻って座っていると、足音が近づき、前田先生

が戻ってきた。

「春日部さん、待たせてごめんね。」そう言うと、診療台に設置してあるフラットパネルモニターとマウスに手を伸ばし、撮影したX線写真のデジタル画像を出した。

「これが、今の春日部さんの口の中の状態。親不知のところの歯茎が痛むのはね、これを見る限り、歯が斜めに生えてきているからだと思う。うーん・・・だからまずは・・・抜いちゃおうか」お決まりの笑顔でさらりと言う。

「えっ？抜くんですか!？」

「うん、抜く抜く」。抜かないとこれ、絶対虫歯になるもん。歯ブラシ届かないし、磨きにくいでしょ？」

「・・・はい・・・」

先生は、ふつと微笑んで言う。「大丈夫。痛くないようにするから。」

その優しい表情と言葉に、ただコクンと頷いてしまった。

「他にも小さいけど悪い箇所があるから、徐々に治していこうね。最後に一度、口の中を見てもいいかな？」

そう言つて、シートを倒し、ライトを当てる。ミラートップを近づけ、「はい、開けてー・・・」と、先生の顔も近づいてくる。

口の中に、ミラートップを冷やりと感じる。

胸がトクトクと高鳴る。先生の、マスクと目元の境界線をじっと見つめる。

「うん、OK。じゃあ、今日はこれで終わりです。次回はまず、左上の親不知から抜いていこうね。」

シートを起こしてもらい、うがいをし、バッグを持って待合室へ向かう。

「春日部さん」と、また背後から呼び止められる。

「はい」と、振り返る。

前田先生はいつも、笑顔で最後にこう言う。

「おつかれさまでした。お大事に。」

笑顔を返し、軽く会釈をして診療室を出た。

ビルを出て、同じ銀杏並木の歩道を歩く。

前田先生って・・・、今までに会ったことないような先生だな・・・。

帰りのバスを待ちながら、今日の夕食のメニューを考える。

今日は何にしようかな。

先生の眼差し。

「歯医者さんどう？」

深夜2時、遅い夕食を食べながら和晃が聞いてきた。

「うん、和晃が言ってた通り、すごくいいところ。」

「だろ？怖くなかったろ？」

「最初は怖かったよやっぱり……。でも、内装とかすごく綺麗でビツクリした。最近の歯医者さんって、みんなあんな感じなのかな？」

「歯医者も今はたくさんあるし、いかに患者をたくさん呼ぶか、いろいろ大変なんじゃないかなあ……」

「そうなんだろうね……。ねえ、和晃の担当の先生は誰？」

「俺？俺は加護先生って人。」

ふいに、前田先生じゃないことに、なんとなくホッとした。

「ふうん……。どの先生だろう？」

「眼鏡かけてるよ。」

「今度行った時探してみようっと。」

「次はいつ？」

「明日。親不知を抜くって言われた。」

「うわっ！なんか痛そう！」

「プレッシャーかけないでよっ」

「気をつけて行きなさいね。」

「うん、大丈夫よ。」

和晃に紹介してもらったクリニックなのに、クリニックのことを和晃と話すのは、妙に心地悪かった。

「今度の私の誕生日は休めそう？」

「んんー……。26日かあ……。ごめん、無理っぽいなあ……」

結婚してからは、お互いの誕生日も、結婚記念日でさえも、一度も二人で祝っていない。和晃が忙しすぎて、都合よく休みが取れないからだ。

和晃が休めないと言うのも予測済みで、驚きもしなかった。いつものことだ。

「あ、そう。じゃあ私、友達と外に食事に行ってもいい？」

「うん、いいよー。たまには贅沢しておいでよ。」

「うん、じゃあそうする。『デイル』に行こうかなと思ってるんだ」

「今井さんのところ？」

「うん、いいかな？」

「いいんじゃない？俺が伝えといてやるよ。」

「よろしく。」

今井さんは、和晃の直属の上司だ。和晃が料理長を勤める店は、『デイル』の支店であり、他にも市内に店舗が4つ。今井さんは、その全ての店舗の統括料理長で、基本的には『デイル』本店で仕事をしている。上司と言っても和晃とは同じ年で、肩書きに関わらず、二人は仲がいい。『デイル』は、ランチは主にビュッフェスタイル、デイナーではコースとアラカルトが楽しめる、フレンチ中心の洋食レストランだ。

前々から、次の誕生日は『デイル』に行こうと決めていた。

いよいよ、3度目の歯科診療の日。

今日はまた少し、違った緊張感があつた。抜歯なんて、子供の時以来だ。

予約は12時。いつも通り、バスで駅前へ向かう。

バスの中で、この前の「大丈夫。痛くないようにするから」と言っていた、前田先生の顔を思い出していた。

患者を安心させるのも、仕事のうち・・・？

月曜日の正午のクリニックはとても空いていた。待合室に座る患者は一人もおらず、診療室も、いつもの忙しそうな雰囲気はない。受付を済ませてソファに座ろうとすると、すぐに診療室の扉が開

き、前田先生が出てきた。

「春日部さんっ、こんにちはっ。どうぞ」

笑顔で軽快に名前を呼ばれた。

「あ、はい・・・」

薄いグレーのシャツ、シャツに合わせたセンスの良いネクタイ、長い白衣。今日はまだ、マスクはしていない。

診療室に入っすぐの、2番ブースに案内された。いつもは、診療ブースの殆どが患者でいっぱい、医師や助手が忙しく動き回っているのに、今日は、助手の姿も2、3人といったところだ。テレビで流れる洋画はラブストーリーのようで、診療室は、映画の静かなサウンドトラックに包まれていた。

診療台に座ると、前田先生がマスクをつけて、診療の準備を始めた。いつもなら、助手の女の子がやる仕事だ。スカートを穿いている私にひざ掛けをかけ、給水口にはうがい用の紙コップを置く。カチツとセンサーが反応し、水が注がれる音がする。

「じゃあ今日は、左上の親不知から抜いていこうということなんだけど・・・」そう言いながら、後ろからそっと手を回し、淡いブルーのスタイを胸元に掛けてくれる。治療器具をジャラジャラと出しながら、「今日、ご飯いっぱい食べてきた？」と尋ねてくる。

「・・・？はい・・・。え？」

なんでそんなこと聞くんだろう？

「あ、いや、麻酔するとね、2時間くらい、舌の感覚がなくなっちゃうから、熱いものとかで口の中を火傷したら大変だからね。しばらくは、食べ物を控えたほうがいいんだけど・・・」

「ああ、そうなんです。大丈夫です。」

「大丈夫？うん、よかった。ちゃんと麻酔をして、なるべく痛くないようにするからね。」

先生は優しく微笑む。

わかってる・・・。と微笑み返す。

前田先生なら大丈夫。

「じゃあまずは、歯茎の表面を軽く痺れさせるお薬をつけるね。シートを倒しまーす・・・」

シートを倒し、口にライトを当てる。

「はい、開けてー・・・」

口の中に、ツンとした強い香りと、慣れない味が広がっていく。不味い・・・。

「はい、一度うがいをしていいよ。ちょっと待っててね。」

ライトを消し、シートを起こす。

うがいをしても味は消えず、左上の奥に、かすかな痺れを感じる。天井にあるテレビを見上げる。流れているラブストーリーは、主要登場人物がたくさん出てくる、オムニバスだ。以前、CSの映画専門チャンネルで放送しているのを観たことがある。最後はみんなが幸せになる、ハッピーエンドだったと思う。

数分経って、前田先生が戻ってくる。

「春日部さん、ちょっと痺れてきた？」

先生の方を向いて、コクコクと頷く。

先生は笑って「うん、じゃあ、麻酔をしていこうね。」

シートを再び倒し、ライトを当てる。先生は、右手に麻酔のシリンジを持ち「はい、開けてー・・・きもち・・・左を向いてくれる？」と言う。

少しだけ、顔を左に向ける。

「うん、そう。ゴメン、薬が入っていくとき、ちょっと痛むかも・・・ゴメンね・・・」

そう言って、ゆっくりとシリンジを口の中へ進める。

左奥にチクリと感じ、そのままガキガキと歯茎が凝固していくような感覚と、強い痛みが走る。

「ゴメンね、痛いよね、ゴメンね・・・」

そのまましばらく、先生は真剣に針先を見ている。

周りには誰もいない。しん・・と、静かで穏やかな時間が流れる。

先生の真剣な眼差しに、思わず見蕩れてしまう。

先生の視線から、目が離せない。

先生の目。

先生の瞳。

マスク越しに、先生の吐息が聞こえる。

ネクタイ越しに、先生の鼓動が聞こえ、自分の鼓動と重なる。

先生は、私の視線に気付いてか、ゆつくりと、長いまばたきをした。

青いマスクのラインに沿った、切れ長の目が凛々しい。

ああ・・私・・・

ゆつくりとシリンジが抜かれ、先生はふつと笑う。

「はい、閉じていいよ。口の中が苦いでしょ？一度うがいをしてね。麻酔が効いてくるまで待とうね。」

そう言ってシートを起こし、先生はまたブースを出て行った。

紙コップを持つ手が震えた。

待つ間、ただぼんやりと座っていた。

気付いた自分の気持ちに動揺していた。

ただ動揺していた。

私・・・、この先生のことが好き・・・

グローブをして戻ってきた先生が、シートを倒す。

胸の鼓動が早くなる。

「麻酔は効いてきたかなー・・・。少し、動かしてみようね。痛いときは手を挙げてね。」

コクンと頷く。

先生は微笑む。

「うん、じゃあ、開けて・・・」

鉗子を口に進める。白衣の袖を肘まで捲った先生の右腕に、力が入ったのがわかる。

左上に、メキッという音が響いた。

「痛い??」

先生は心配そうに聞く。

私は首を弱く横に振る。

また微笑む。

「うん、もう抜けてるからね。出血も少ないから安心してね。しばらくの間止血するから、これを噛んで、横になったまま待っててね。」

白いローラーコットンを口に入れられる。

「抜いた歯、持って帰る??」と、笑いながら聞いてくる。

「い・・・いらなひでふ（いらなひです）」

「ハハハ・・・いらなひよね。じゃあ、こっちで処分しちゃいます。血が止まるまでもう少し待ってね。」

ライトが消され、診療台の上でぼんやり待つ。

胸の鼓動は、トクトク鳴りっぱなし。

音を、先生に聞かれるのではないかと思った。

「はい、開けて・・・」

ゆっくりと、ピンセットでコットンを取り出してくれる。

「うん、大丈夫。しばらくうがいはしないでね。シートを起こすよ
！・・・」

起き上がるとき、少し頭がフラツとした。

「春日部さん、明日来られる?」

「あ・・・はい・・・」

「うん、じゃあ、明日も来てくれるかな。状態を見て、消毒をするからね。」

「はい」

後ろから手を回し、ゆっくりとスタイを外してくれる。ひざ掛けを取り、バッグを手渡してくれる。

そして

「おつかれさまでした。お大事に。」

微笑んでくれる。

微笑み返す。

待合室に行き、ソファで会計を待つ。

待っている間もずっと、診療室の前田先生を目で追っていた。

視線に気付いたのか、前田先生がこっちを見る。

目が合う。

先生は、マスク越しに笑顔を向ける。

もう・・・その笑顔から、離れられない。

先生のこと。

銀杏並木の歩道を、ゆるやかに冷たい風が吹く。
視界に入る景色の音が聞こえない。

聞こえるのは、トクトクと鳴り止まぬ胸の鼓動だけ。
ただ呆然としながら歩いていた。

左上の頬には感覚がない。

私は結婚している。

和晃と5年の恋愛の末、結婚した。

和晃を愛して疑わない。

和晃以外に、好きになれる人なんていない。
ずっと、そう思ってきた。

さっきまでは。

自分で自分が信じられなくなる。

自分で自分がわからなくなる。

自分の不誠実な感情に、絶望すら覚える・・・

何時のバスに乗ったのか、どこを通って帰ってきたのか、家に着いてもあまり記憶がなかった。リビングに座って、しばらくぼんやりしていたが、とりあえず夕食を作った。

食欲はなかったが、一人で夕食を摂る。

結婚をしてから、2日続けて和晃と一緒に食事をしたことはない。

もう2年近く、朝も夜も、食事は一人で摂っている。和晃が今の仕事を続ける限り、それは続く。一人での食事など、決して楽しいものではない。

だからこそ、和晃には寂しい食事をさせることのないように、何時になっても起きて帰宅を待つ。それが、養ってもらっている主婦と

しての恩返しだと思っている。

「尽くす」ことは嫌いじゃない。

和晃と一緒に暮らして6年、出来る限り尽くしてきた。通勤中に車内で食べる朝食の為に、毎日欠かさずサンドウィッチを作り、片付けの下手な和晃の代わりに、タンスの服は毎日必ず整理する。和晃が使う髭剃り用のシェービングも、使い切る前に新しい買い置きをし、長期連続勤務が続けば栄養ドリンクを買っておく。料理人である和晃をがっかりさせないように、夕食には腕をふるう。毎日が、和晃中心に回っている。

そんな自分の努力を、自分で打ち消してしまうほど、心で和晃を裏切ろうとしている。

和晃への気持ちは今も変わらない。だけど。

人を好きになったのは初めてではない。

だからわかる。

前田先生への気持ちは膨らんでいく。

多分、これからもっと。

キッチンで食事の後片づけをしていると、抜歯した左上が徐々に痛み始めた。痛みはだんだん重くなっていく。クリニックから処方された痛み止めを飲み、和晃の帰りを待つ間、パソコンを開いた。

前田先生のことを知りたい。

クリニックのホームページを開いてみた。

医院紹介から始まり、最新技術の説明などが、写真と共に掲載されている。「ドクター紹介」というのをクリックしてみた。見慣れた医師の顔写真とプロフィールが並ぶ。一番最初に、和晃が担当の先生だと言っていた、加護先生の名前があった。

あー・・・この人か。

スクロールを下へ動かすと、4番目に前田先生を見つけた。

淡いブルーのシャツにネクタイ。初めて会った時を思い出させる服で、先生は写っていた。プロフィール文には、「歯科医師 前田晋

一 歯科大学卒。 クリニック院長。」とあった。 歯科

大学は、隣の市にある大学だ。クリニックには、姉妹病院が4件あり、前田先生はその中の1つの院長という肩書きのようだ。

本人コメント欄を読んで驚いた。「患者様を第一に考え、口腔内を総括的に治療していきます。こう見えても体育会系で、ラグビーをやっていました。体力には自信があります。よろしく願います。」

ー

ラグビー！？・・・てかんじじゃないんだけどなあ・・・

晋一っていうんだ・・・

意外だった。というか、信じられなかった。前田先生は、それが第一印象だったくらい、体はそれほど大きくない。色白で、男性にすれば指先も細い。ラグビーといえば、もつとがっちりしていて体が大きい人というイメージがあった。白衣の前田先生からは想像がつかない。

どんな大学生だったのだろう。

ラグビーをしている時はどんなかんじだろう。

出身はどこなのだろう。

今、何歳だろう？

いろんな想像が頭を巡る。

そして思わず、プリントアウトしてしまった。

・・・このくらいいいよね・・・

ブラウザの中の先生を見る。

昼間の診療が甦る。

パソコンの前で一人、顔が熱くなつていくのを感じる。

「明日も来てくれるかな。」と言った先生の声が、頭に響く。

深夜1時。携帯が鳴る。

仕事を終えた和晃からだ。

「もしもし？」

「もしもし」

「うん、おつかれさま」

「今終わったよ。」

「今日も忙しかった？」

「んー、相変わらずね。それより抜いたところは大丈夫？」

「うん、今は痛み止めが効いてる。」

「そうか、やっぱり痛むんだね。」

「仕方ないよ。明日も行かなきゃいけないの。」

「そっか。」

「気をつけて帰ってきてね。」

「はい、じゃあねー」

「はい・・・」

和晃は職場から30分ほどで帰り着く。毎日、それまでに食卓に夕食を並べる。

パソコンをOFFにして、プリントアウトした紙を自分の整理タンスにしまい、キッチンへ向かう。冷蔵庫からサラダを取り出し、お味噌汁を温める。食器棚から和晃のビアグラスを取り出し、箸と一緒にテーブルに置く。

いつもやっていることなのに、今日は違う。やればやるほど、高ぶっていた気持ち、徐々に現実へと引き戻されていく。

私は結婚している。

これが現実。

翌朝、アラームよりも早く目が覚めた。というより、殆ど一睡も出来なかった。

抜歯の痛みのせいでもあり、その痛みが、より先生を思い起こさせた。

すぐ隣では、和晃の寝息が聞こえる。

私は日頃家庭にいて、たまたま外で出会った人に惹かれている。

それならば、毎日、職場でいろんな人と知り合い、忙しい仕事を分かち合っている和晃は、私以外の女性に心惹かれることはないのだろうか。

いや、あるのかもしれない。

今までの私に、そんな発想がなかっただけで。

今日はあいにくの雨だ。今朝の天気予報で、しばらくはぐずついた天気が続くと言っていた。一雨ごとに、これから少しずつ寒さを増していく。

ビルの前で立ち止まり、何気なく5階を見上げた。

先生に・・・会える。

クリニックは、昨日とは全く違い、いつもの慌ただしさを取り戻していた。待合室のソファも人でいっぱい、診療室の扉からは、左右に行き交う医師と助手の姿が見える。

抜歯後の消毒とはいえ昨日の今日で、予約は希望の時間には取れず、クリニックに指定された時間は16時。いつも来る正午頃は、忙しそうではあるが、待合室は人が疎らだ。この時間の患者の多くは、仕事帰りのOLやビジネスマンで、人気の噂も本当だった。

20分ほど待ち、ようやく名前を呼ばれた。

「春日部さんっ」

カルテを持った前田先生が、左手で手招きをしている。
笑顔が少し疲れている。

「こんにちはっ。待たせてごめんね。奥の8番に入って。」

「はい。」

8番ブースに向かって歩こうとすると、

「昨日大丈夫だった？」と、私の顔をまじまじと見ながら先生が尋ねた。

「夜、ちよつと痛くて。」

「痛かった？そっか。痛み止めは飲んだ？」

コクンと頷く。

「うん、わかった。すぐ行くから。」

「はい。」

8番から10番ブースは、扉のある個室になっている。見たこともないような医療機器が置いてあり、特別な治療を施す部屋といったかんじだ。

「春日部さん、座っていいよ。」

背後から先生が言った。

「今日はすぐに終わるからね。」

「はい。」

診療の準備をする先生を目で追った。

「痛み止め、もう少し出しておこっか？」

「あ・・、はい、できれば。」

「うん。じゃあ、ちよつと見せてね。倒しまーす・・」
シートが倒され、先生がぐつと近くなる。

胸の鼓動が早くなる。

ミラートップを口に入れ、先生が覗き込む。

「うん、大丈夫みたいだね。」

消毒をして、シートを起こす。

右隣でカルテに書き込む先生を、ただじつと見つめてしまう。
ラグビーかぁ・・・素敵だろうな・・・。

トクトクトクトク。鼓動は鳴る。

「春日部さん・・・」

先生が私を見る。

「熱とかないよね？」

「え？」

「ちよつと、顔が赤い気がするんだけど・・・」
ドキツとした。

「ないです・・・」

「ホントに？昨日抜歯してるから心配なんだけど・・・」

「ないです、ホントにつ。大丈夫ですっ」

先生はふつと笑う。

「うん、それならいいけど。今日は、これでおしまい。次は・・・いつ来る？来週くらい？」

「あ、はい・・・」

「うん。じゃあ次は、右上の親不知を抜こうね。春日部さんは、写真を見る限り、下には親不知はないみたいだから、抜くのは次が最後だよ。」

「はい・・・」

「うん、じゃあ、また来週ね。」

8番ブースを出る。

もう少し、先生といたかった。

「春日部さん」

振り返る。

「おつかれさまでした。お大事に」

その笑顔が好き。

会釈を返す。

次の予約は25日に取れた。

帰り際、駅の書店に立ち寄った。スポーツ関係の本の売り場付近は、立ち読みする男性で溢れている。サッカーや野球、ゴルフの本は割合たくさんあったが、ラグビーの本は数冊しか置いていなかった。「よくわかる。ラグビー ルールと試合」という本を手にとった。パラパラとめくり、自分に理解できるのかは半信半疑だったが、レジへ歩いた。

バスの中で、本を開いた。

今日はCSで、ラグビーを観よう。

近くない先生。

ラグビートップリーグの試合中継を観ながら、買ってきた本を開いて座っていると、お風呂上りの和晃が、後ろで声を上げた。

「ええっ??」

「なに。」

「好きだったっけ?ラグビー?」

「最近ね。おもしろそうかなって思っで。」

「そうなの??まあ、はるかにはスポーツ好きだもんねー」

「うん、観るのがね。ねえ、和晃はラグビー詳しい??」

「いやー・・あんまりわかんないなー。俺は球技はちよつとねー・・苦手だし。」

「そうだった。」

小学生の頃は、身長を伸ばしたくてバスケットボールをやった。高校生の頃はプロ野球を観るのが好きで、学校からそのまま球場へ向かい、試合を観て帰ったりした。冬季オリンピックの中継でアイスホッケーを初めて観て、しばらくはアイスホッケーばかり観ていた。その反面、和晃はスポーツ観戦には全く興味がない。球技も本当に苦手なようで、学生時代は水泳を、20代始めの頃は、サーフィン、スキー、スノーボードをやっていたようだ。競うものより、自分で楽しむものを好むところは、いかにも温厚な和晃らしい。水泳は学生の頃授業でやった程度で、スキーやスノーボードの経験がない私とは、ことスポーツに関しては、お互いに全く話が合わない。

今まで、ラグビーの試合中継など、ちゃんと観たことはなかったが、やはりイメージ通り、選手は体が大きくガッチリしている。しかし、中には比較的小柄な選手もいて、ポジションで言うスクラムハーフには、そんな選手が多いように思えた。肩を並べ、勢いよくスクラムを組むフォワード、攻撃の要・司令塔となるハーフバック、駿足と呼ばれ、ボールを持ったらゴールラインめがけてトライを狙うス

リーグウォーターバック、ディフェンスリーダーのフルバック。
前田先生なら、やっぱりスクラムハーフかなー。・という想像と共に、先生と背番号9番が、時折重なって見える。前田先生がやってきたスポーツというだけで、試合を観るのが無条件に楽しくなり、横文字の多いルールやペナルティなども、すんなり頭に入ってくる。

ラグビーを観ている私の隣に、缶ビールを片手に和晃が座った。

「26日のこと、今井さんに言つといたよ。」

「あ、本当？2名で予約してくれた？」

「うん、でも、時間はまだわからないんだよね？」

「んー、25日がまた抜歯なんだ。次の日は消毒に来て下さいって言われるから、ディナーの前にクリニックに行こうと思って。そっちの時間次第かな」

「また抜くのー？左もまだ治ってないのに？」

「うん、そうみたい。またあの痛みとの闘いよ。」

「抜いた後が痛いんだよねー」

「抜いたことあるの？」

「あるよ。だから痛いのは知ってる。」

「そうなんだ。」

「『ディル』には友達と行くんだっけ？高校のときの」

「うん。友里も夕方までは仕事だから、『ディル』の前で直接待ち合わせする。」

「今井さん、サービスするって言ってたよ。」

「ホント？？やったー。」

テレビからホイッスルが聞こえ、黄色いユニフォームのレフリーが左手を高く上げた。

選手がトライを決めた。

翌日、雨は上がっていたが、曇り空で気温も低かった。
誕生日のディナーに着て行く新しい服を買おうと思い、厚手のコー

トを着て、美容室のあるショッピングモールへ向かった。服を見る前に、美容室を覗いてみた。

「こんにちは。」

「おつ、春日部さん、こんにちはっ！」

牛嶋さんが1人、フロントに立っていた。店内には、他の美容師さんも、お客さんの姿もない。

「あれ、1人？」

「そうなんすよ。今日、暇なんす。予約ゼロ。」

牛嶋さんは苦笑いで言った。

「他の人は？」

「今、休憩入ってます。買い物つすか？」

「んー、ちよつと服見に来た。」

「そうすか。」

「うん。」

牛嶋さんが、私の髪をじつと見て言った。

「髪、よかったらまた少し切って行きませんか？」

「え？」

「んー、なんか、もう少し短くても似合うと思うんすよ。今もボブスタイルだけど、もうちょい短めのショートボブくらいに」

「切ってからまだ1ヶ月も経ってないよ」

「いいじゃないっすか。カット料金、ちよつと安くするんで。」

話をしている間、お客さんは1人も来ない。暇な牛嶋さんが、少し不憫に思えた。

「わかった。じゃあ、お願いします。」

「マジっすか！？ありがとうございます！やー、言ってみるもんすね。」

「安くしてくれるんでしょ？」

「もちろんすよ」

美容室を出てから、一度化粧室に向かった。化粧室の鏡で、もう一

度ショートボブに仕上がった自分を見る。確かに、牛嶋さんの言う通り、さつきまでよりこっちの方がいい。雰囲気が少し、軽くなつた気がする。成り行き任せで切ってみたが、意外に気に入ってしまった、それだけで嬉しくなった。

そのまま服を見て回った。どの店も、新作の冬物が所狭しと並んでいる。

誕生日のデイナーに着て行く服を買いたいというのもあるが、どこか前田先生を意識している自分がいる。

ピュアホワイトのボウタイブラウスを買ひ、家に帰った。

夜、帰宅した和晃が「ただいま」よりも先に言った。

「あれ??また短くなつた??」

「あはは。うん、つい流されて、また切っちゃったー」

「流されて??ていうか、どんどん短くなつていくなー。。学生のころみたいだね」

「あー。。そうだね。あの頃はもつと短かったけど。」

「でも、そうするとなんだか、はるかはやっぱりショートの方が似合つてるかな。はるからしい。」

「そお?」

「んー」

25日。昨日まで晴れていたのに、クリニックに行く日になると雨が降っていた。普段、通勤などをしているわけではない為、傘を持つてバスに乗るとというのが億劫だった。

他の歩行者と傘の端がぶつかったり、走行車が歩道に水を飛ばすのを避けたりしながら、ようやくビルにたどり着く。天気が良い日より、幾分遠く感じてしまう。

クリニックの入り口にある傘立ては、他の患者の傘でいっぱい、今日も忙しいのだろうと予想がついた。

待合室のソファに座っていると、初めてクリニックに来た日に案

内してくれた、50代くらいの女性の助手に名前を呼ばれた。

「春日部さまー・・・」

診療室に入ると、前田先生は5番ブースで男性患者の治療に当たっている。その後ろを通り、前回と同じ8番ブースへ案内された。

「荷物をお預かりしますね」

そう言つて、女性がバッグを壁のフックに掛けてくれた。診療台に座ると、ブースの入り口から「下山さん」と呼ぶ男性の声が聞こえた。声の方を振り向くと、和晃の担当の、眼鏡の加護先生が立っていた。助手の女性は「下山さん」というようで、仕事のことで何か注意をされているようだった。下山さんは、クリニックの助手や歯科衛生士の中では、数少ない年配の女性だ。加護先生は、かなり厳しい口調で下山さんを叱咤して、ブースから去っていった。

下山さんは「失礼しました」と私に一言いうと、診療の準備を始めた。

医師の技術もそうだろうが、助手として働いている人への厳しい教育があるからこそ、市内NO・1と呼ばれるクリニックが成り立っているのだろう。

「先生が来るまでお待ち下さい。」

そう言つと、下山さんもブースから去っていった。

5分ほど経つて、前田先生がやって来た。

「春日部さん、こんにちは」

「こんにちは・・・」と、前田先生を見ると、思わず吹き出しそうになつてしまった。何があつたのか、いつものさわやかな感じとは違い、先生の髪はボサボサだった。

「お・・・お忙しいんですか??」と、つい聞いてしまった。

「え??なんで??」

「だってあの、髪、グチャグチャです」

「えっ?ああ、うそ?グチャグチャ??」そう言つて、先生は照れくさそうに、慌てて髪を右腕で直した。

「ゴーグルを着けたり外したりするからさあ・・・あはは」

先生は、フラットパネルモニターに、私のX線写真のデジタル画像を出し、じっと見ながら、「うん」と何かに納得し、「じゃあ、今日は右上の親不知を抜くからね。」と、いつものように笑顔で言った。

表面麻酔をした後、シリンジで麻酔をする。

これだけでも痛い。

「痛いよね・・・ごめんね」

麻酔をしている間、先生の顔がすぐそこにある。でも、前回のように見つめる勇気はなく、目線は洋画の流れるテレビの方を向いていた。

シリンジをゆっくりと抜き、「ちよつと待ってて」と、先生はブラスから出て行った。

先生がいなくなると、大きなため息が漏れる。

緊張する・・・。

先生は、前回の麻酔の時より早く戻ってきた。モニターの右下に表示してある時計で時間を確認すると、「ちよつとごめんね」と言つて、自分の右手の人差し指を、私の右の頬に乗せた。

わっ・・・

今日は落ち着いていた鼓動がいきなり鳴り始める。

麻酔を早く効かせる為か、指で頬を軽く解している。

先生は真剣に私の顔を見ている。

触れられている、見られている。

鼓動が早くなっていく。

右頬に、先生の指先の体温が伝わってくる。

トクトクトクトク、息も苦しくなってくる。

先生はふつと笑う。

「じゃあ、ちよつと動かしてみようね」

そう言うと、グローブをして鉗子を口の右上奥に入れた。

先生の腕に力が入り、メキメキツと耳に響いた瞬間、激痛が走り、思わず目をかたく閉じてしまった。

「うわっ、痛かった!？」と、先生が慌てて力を抜いた。声を出せず、ただ少し頷いた。

「ごめん!!大丈夫!？」と、心配そうな表情で聞いてくる。

「だい・・じょうぶです・・」と、なるべく笑って答えた。

「もう抜けるからね・・、本当にごめん・・」

そう言うと、グローブをした左手で右頬を優しく2回撫でた。ローラーコットンで止血をする。

「血が止まるまで、もう少しこのままでいてね」

笑顔で言うと、先生はブースを出て行った。

数分経って、下山さんが入ってきた。口の中のコットンを取り出し「本日はこれで終わりです。明日、消毒にいらして下さい。」と、事務的な口調で言った。

8番ブースを出ると、前田先生は隣の7番ブースで、別の女性患者の治療に当たっていた。

心の中に、じわりと嫉妬心が湧いたのがわかった。

私以外にも、女性患者はいくらでもいるのに。

そんなの、当たり前のことなのに。

こんなことで、嫉妬する自分が恥ずかしかった。

先生の後ろを通り、待合室へ向かう。

いつもなら、ここで先生が呼び止めて、その笑顔を向けてくれるはずなのに。

「おつかれさまでした」は なかった。

治療の時は、その距離10cm。

でも、先生は近くない。

先生は医師で

私は患者。

先生の後姿を横目で見ながら、診療室を出る。

先生の指先の温もりが残る、

右の頬が、ズキズキ痛い。

先生の存在。

痛み止めを飲んでも、数時間経つとまた痛んだ。

夜は出血が止まらず、夕食はあまり食べられなかった。

痛みで何もやる気になれず、和晃の帰りを待つ間、横になることにした。

どのくらい眠っていたのか、携帯電話の着信音で目が覚めた。
時計を見ると深夜の1時だった。

和晃・・・？

「もしもし？」ぼんやりしたまま電話に出る。

「もっしもしし！！はるちゃん、起きとったあ？？」

「・・・麻耶ちゃん？」

『あ、ごめんなあ、もう寝とったん？？』

「うっん、大丈夫。」

『はるちゃん、お誕生日おめでとう！』

「あ・・・ありがとう。そっか、もう26日か・・・」

麻耶ちゃんは、三重県在住の、小学生の頃からの友人だ。小学生の時クラスで流行っていた文通で知り合い、手紙のやり取りで14年付き合っている。携帯電話やパソコンを利用するようになってからは、そっちでのメールのやり取りの方が多くなってしまったが。

『なんやー、はるちゃん、誕生日なのに元気ないなあ。相変わらず、』

旦那は遅いん？』

「んー・・・まだ連絡ない。」

『誕生日くらい、早う帰ってきて欲しいよなあ・・・』

「そうだねー・・・」

『明日は旦那と過ごすんやろ？』

「うっん」

『え？過ごさへんの？はるちゃん1人？』

「いや、友達とご飯食べに行くけどね」

『そうなん？旦那、仕事忙しいんやなあ。』

「んー、まあ、忙しいうちはいいんじゃないかな。暇になっちゃうと、売り上げとかに影響するし」

『そら、そうやな。忙しいうちが華やな。はるちゃん喰わしていく為に頑張ってんねやもんな』

「ははっ、そうだね。頑張ってくれてる。」

『ホンマ元氣ないなあ……。何かあったん？』

「今日、親不知を抜いてさー……。2回目。」

『うわっ！そら痛いなあ。そんで元氣ないんや。』

「出血はするわ、痛むわで、ちよっとしんどくて」

『そうかー……。そら辛いなあ』

「麻耶ちゃん、元氣にしてた？」

『うん、ウチは元氣よ。わかるやろ？。』

「うん、わかるけど。ははっ」

『仕事は何かと忙しいねんけどなー。まあ、私なりに頑張っとるわ。』

『

「忙しいのか……。みんな大変だなあ。彼氏は？今いるの？」

『おるよ。最近出来てん。楽しむところは楽しんどるわ』

「そっ。それは何より。」

『はるちゃんは？旦那とは仲良うやっとする？』

「うん」

『はるちゃん、いつも1人やし淋しいやろうけど、はるちゃんなりに楽しまなあかで。ウチらまだ若いんやしさあ』

「うん。そうだね」

『うん。ほな、また電話するわあ』

「ありがとうね、わざわざ」

『ええのよ。ほな、またな』

麻耶ちゃんとは、学生時代からお互いのいろんな悩み・秘密を打ち明け合ってきた。地元の友人などは、結婚するところか疎遠になっ

ていったが、麻耶ちゃんは、初めから遠く離れていたからこそ、今でも変わらぬ関係でいられるのかもしれない。

和晃が帰宅したのは、深夜の2時を過ぎていた。

「誕生日なのに、一緒にいてやれなくてゴメンね。明日は今井さんによく頼んであるから、楽しんでおいでね。」

「うん、ありがとう。あ、予約は21時でお願いしといて。」

「わかった」

結婚してから、和晃と一緒に過ごす時間は随分少なくなった。出勤が早く、帰宅も遅い為、深夜、1〜2時間顔を合わせている程度だ。結婚してからしばらくは、淋しいと思うこともあった。

・・・いつからだろう。

それが当たり前となって、淋しいとすら思わなくなったのは。

誕生日当日。

右上の頬には、まだ痛みが残っていた。

クリニックの時間に間に合うように出掛ける準備をしていると、携帯にメールが届いた。

一緒に食事をする予定の友里だ。

『今、仕事終わったよ。何時に行けばいい？』

待ち合わせの時間を指定し、返信する。

『わかりましたー。楽しみにしてるよ』

高校時代は、友里の他に2人の女友達といつも一緒だったが、他の2人は結婚してから子供を授かり、4人で集まることはなくなった。唯一、友里は独身で、子供のいない主婦の私と、時々会っては食事をする。

日が暮れた時間に出掛けるのは久しぶりだ。

バスに乗り駅前へ向かうと、歩道の銀杏はすっかり葉を失い、枝だけになった木が並ぶ。景色は秋から冬へ。クリニックがあるビルの

前では、数人の作業員が、木に電飾を施している。イルミネーションの準備だろう。

待合室のソファーには、誰も座っていなかった。22時まで受け付けているといっても、20時を過ぎれば昼間や夕方の忙しさはないようだ。

受付を済ませて待っていると、診療室から前田先生が出てきた。

「春日部さん、どうぞ」

白衣の下にはダークグレーのシャツに黒のネクタイ、今日はシックに決まっている。

「こんばんは」と、優しい笑顔。

「こんばんは」と、笑って返す。

診療室も静かだった。助手や他の医師の姿も2、3人で、患者も奥に2人ほど見えるだけだ。

4番ブースに案内された。

診療台に座るなり、先生が背後から言った。

「あれ？髪、切りました??」

え・・・ そんな表情をして振り返る。

「昨日も来たのに・・・」

「あつ・・・昨日はあ・・・忙しかったからね・・・」

先生は、気まずい笑みを浮かべて言った。

それでも、髪を切ったことを気づいてもらえた。それがたまらなく嬉しかった。

「昨日、抜くとき、痛い思いをさせてごめんね。あの後、大丈夫だった?」

先生は背後から手を回し、首元にスタイを着けながら話しかける。

「夜、出血が止まらなくて、結構痛かったです。今もちよつと・・・」

「痛む?」

「はい・・・」

先生はカルテにペンを走らせる。

「うん、それじゃ、もう少し痛み止めを出しておこうね。」
消毒をする為にシートを倒す。

青いマスクをした先生は、ミラートップを片手に、私の顔の目の前で頷いている。

「左上の時より痛むのはね、右上の方は少し、乾いたかんじになつてて、そのせいで痛むんだけど・・。でも、ちゃんと治るし、痛みも徐々に治まってくるから、心配要らないよ。」

「はい。」

「うん、それじゃ、うがいをしてね」

シートを起こしてもらい、うがいを済ませる。

「春日部さんが夜来るなんて珍しいね。」

スタイを外しながら先生が言う。

「あ、今日は、今から友人と食事の約束があつて。誕生日で・・」

「え？そうなの？？」

先生はカルテの生年月日を見る。

「あ、本当だ。おめでとう！」

先生はマスクを取って言った。

「あ・・ありがとうございます。」

周りには誰もいない。少し離れたところから、別の患者の治療をしている医師と助手の声が聞こえるだけ。

まだ、カルテに何か書き込んでいる先生に、思い切って話しかけてみた。

「先生・・」

「ん？」

「先生つて、ラグビーをなさってたんですか??」

「え？あーうん、なんで知ってるの？」

「あ、この前、ここのホームページ見てたら書いてあつて・・」

「あゝあれねー。そうそう、そういえばそんなことも載せてたね。うん、ラグビーやってたよ」

「へえ・・」

「なんで？ラグビー好き？」

「最近、興味持ったんですけど、まだ詳しくはないんです。」

「そうなの？？女性でラグビー好きって珍しくない？僕の周りには
いなくてさー。ラグビーの話を振ってくれた患者さんも初めてかも
」

「ポジションはどこだったんですか？」

「ポジションわかるの？？」

「・・・少しなら」

「スクラムハーフ」

「あー・・・」

「ん？？」

「そうかなーって思ってたから」

「ははっ、そう？僕ね・・・」

と、先生が言いかけたところで、受付の女性の声が診療室に響いた。
「20時半ご予約の患者様いらっしゃいました。前田先生の担当で
す。よろしくお願いします。」

「はい」

先生は上向き加減で言った。

「じゃあ・・・残念だけど、今日はこれでおしまいだね。また、来週
くらいかな？」

「あ、はい。」

「うん、それじゃあ、お食事楽しんでください。」

「ありがとうございます。」

「いつてらっしゃい、お気をつけて。」

先生は、手のひらを向けて笑顔で言った。

ビルを出ても、嬉しくてたまらなかった。

1日遅れだけど、髪を切ったと気づいてくれた。

おめでとうとってくれた。

今日は「おつかれさまでした」ではなく「いつてらっしゃい」

先生の言葉、先生の表情。

1つ1つが、喜びに変わる。

先生の存在が、大きくなっていく。

先生の存在が、確かなものになっていく。

『デイル』の前でバスを降りると、友里はすでに来ていた。

友里は、高校を卒業してすぐに、デパートの婦人靴売り場に就職した。2年前に人事異動があり、今はインフォメーションに立っている。

「はるちゃん！」

友里が手を振った。

「ゴメンゴメン、待ってた??」

「ううん、5分くらいだよ。」

「じゃあ入ろうか。寒いし」

「うん、お腹空かせて来たんだ。」

「今日はサービスしてもらえらしいよ。」

「ホントにいい！楽しみー！」

店に入ると、キャッシャーに立っていた接客係の女性が、私と友里に気づいた。

「いらつしやいませ。ご予約でしょうか？」

「あ、はい。春日部です。」

「ああ！お待ちしておりました！どうぞ」

2人掛けのテーブルに案内された。23時までの営業だが、お客さんは疎らだ。

飲み物を注文して待っていると、調理場から出てきた男性がこつちへ近づいてくる。

白いコックコート、膝下まである長い前掛け、黒いズボンを穿いた、

スラリと背の高い今井さんだ。

「こんばんは。本日はご来店ありがとうございます。」

今井さんはニコニコしながらお辞儀をした。

「こんばんは。今日はお客さん少ないんですね。」

「何言つてんのぉ〜！はるちゃんたち来る前まで忙しかったんだよ」

「ええー。ホントかなー」

今井さんは、和晃を「和ちゃん」、私を「はるちゃん」と呼ぶ。統括料理長でありながら、気さくでフレンドリーなところが、部下から慕われている。和晃を採用したのも、支店の料理長に推薦してくれたのも、他ならぬ今井さんだ。和晃の実力を買ってくれている。

「今日は、ケーキも用意してあるから、食べていってね。」

「わー・・・嬉しいです。ありがとうございます。」

「和ちゃんに、くれぐれも祝ってやるようにって頼まれてるからね」

「ホント、すみません。」

「それじゃ、ごゆっくり」

今井さんは、友里にも軽くお辞儀をして調理場へ戻って行った。

飲み物が運ばれ、乾杯をする。

「はるちゃんお誕生日おめでとーうー！」

「ありがとーう」

店内にグラスの音が響く。

「はるちゃん、今日は旦那さんは？」

前菜のサーモンを口に入れながら友里が尋ねる。

「ん？仕事。いつも仕事よ。」

「誕生日なのに残念だね・・・」

「それ、昨日も同じこと言われた。別の友達にね。でも、大丈夫よ。慣れてるから」

「えー・・・でも、やっぱり淋しくない？」

「最初の頃はそんな風に思ってたけど、今はもう、なんともない。」
「そうなの・・・」

「友里は？仕事はどう？」

「んー実はね、今の会社、来年の3月で潰れちゃうみたいなの」
右手のフォークが止まった。

「は？」

「来年の3月で、全員解雇になるの」

「なるのって・・・え？じゃあ、どうするつもりなの？」

「ん？退職金が少し出るみたいだから、それで繋いで次の仕事探す。」
「

「そんな・・・」

「前々からね、そんな噂はあったんだ。だからあんまり驚いてない」
「そうなの・・・」

「あー・・・私もはるちゃんみたいに結婚したいな」

「・・・え？」

「私ねー、はるちゃんと旦那さんみたいな、仲のいい夫婦になりたい
いんだ」

私と和晃に憧れる友里を、どこかまともに見られなかった。

私と和晃は、友里が思い描いているような夫婦じゃない。

多分今は。

「友里、彼氏は？」

「それがねー、今付き合ってる人、年下なんだ。」

「いくつ？」

「5歳下」

「・・・てことは、21？」

「うん。まだ若いでしょー。だから当分結婚はないかなーって・・・
でも結婚したい。はるちゃんみたいになりたいーい」

「ハハ・・・大変だよ、結婚は。」

もし、結婚していなかったら

「でも、はるちゃん幸せそうだもん。」

「そう？いろいろあるんだよー」

もし、結婚していなかったら

「ええー、独身の私よりは、きっと楽しいはず」

「独身は独身の楽しさがあるでしょ？」

私はどうしていただろう？

先生への、この気持ちを。

今井さんが運んできた手作りケーキのプレートには

「Happy Birthday HARUKA from KA
ZUAKI」

とあった。

「和ちゃんリクエストのケーキだよ。作ったのは俺だけだねー」
今井さんは、得意気に笑ってみせた。

和晃の想いが、胸にひどく痛かった。

ケーキを前にしてもまだ、先生のことを考えている。

『デイル』を出ると、少しずつ雨が降ってきた。
友里と別れ、バスに乗る。

雨に濡れた窓ガラスが、街のネオンをキラキラさせている。
綺麗な景色がばやけていく。

胸が痛い。

嬉しいことばかりの誕生日。

なのに 涙が止まらない。

先生への迷い。

和晃の休日は14日ぶりだった。

毎年11月中旬頃から、クリスマスや忘・新年会、正月の企画メニューの作成で忙しい。12月に入ると、忙しさは止まることを知らず、和晃の疲労はピークに達し、そのまま正月を迎え、年明けには必ず1度は体を壊している。クリスマスや年末年始、忙しいながらも世間が浮かれ始める季節、サービス業には、毎年の悪夢がひしひしと押し寄せる。憂鬱なのは、仕事をする本人たちだけでなく、それを傍で支える者たちも同じだろう。

「今日はドライブでもしようか？天気もいいし」

朝食のパンを食べながら和晃が言った。

「どこに？」

「どこでもいいよ。はるかの行きたいところ」

「急に言われてもね」

「たまの休みだし、仕事を思い出さないようなところに行きたいなあ・・・」

「特に行きたいところはないけど・・・じゃあ、都市高速をドライブしてよ」

「あ、いいね。久しぶりに行こうか」

和晃がコーヒーを飲みながら微笑む。

私は昔から、都市高速が好きだった。一般道路よりも高い位置を早いスピードで走り、一周すれば市内のいろんな景色を見ることが出来る。空港、立ち並ぶ高層ビル、いくつもある大きなイベント会場、港や海。昼間の明るい街並みを見るのも好きだが、延々と続くような夜景を見るのも悪くない。

いつも単調に家で家事をしているだけに、都市高速のドライブは、どこか開放感のような、そして、都会に住んでいるという喜びのよ

うなものを感じられる。

出かける準備を整えると、和晃の携帯が鳴った。
仕事の電話だろうと思った。

休日も、食材の発注先の業者や、出勤している同僚から、仕入れや料理のことで電話が入る。仕事の電話なら、15〜16分はくだらないのに、和晃は1分足らずで電話を切った。

「あれ？仕事の電話じゃないの？」

「んー、母ちゃんから」

ん？？と思う。

お義母さんが和晃に電話してくる用事で、動くことになるのは大抵私の方だ。

和晃は長男ゆえ、春日部家での行事ごとでお義母さんからの要請があれば、嫁の私はほぼ絶対服従だ。長男と結婚する以上、それなりの覚悟はしていたが、市内からは随分離れた田舎町にある和晃の実家は、昔からの風習やしきたりを重んじる。

何の用事だったのか・・・少し沈みそうな気持ちになりながら尋ねた。

「お義母さん何て？？」

「大晦日、また、はるちゃんに手伝いに来てもらえないかって」

「ああ、うん。行くよちゃんと」

「朝は俺が送っていくから。」

「うん」

大晦日は毎年、おせち作りのお手伝いだ。お義母さんは、調理師免許を取得している私に絶大な期待を寄せていて、実際はお手伝いというより、作るのは殆ど私だ。和晃の店は年中無休、年末年始の休みなどあるはずもなく、当然、実家に行くのは私1人だ。お義母さんは優しくて温厚で、和晃は母親似だといつも思う。しかし、同居を拒み、和晃が30歳を過ぎているのに子供もいないとなれば、やはりあの家では肩身が狭い。

いつも納得がいかないのは、なぜ私への頼みごとを、和晃を通して

言ってくるのか。
不満を挙げればキリがないが……。それが「長男の嫁」と言われればそれまでだ。

車に乗り込み都市高速入り口を目指す。

「そういえば今井さんが、この前はご来店ありがとうございましたって言ってたよ。」

和晃がハンドルを握ったまま話しかける。

「あ、ホント？すごくおいしかったよ。ちゃんとお礼言っておいてくれた？」

「うん。俺が頼んだケーキ、今井さんがかなり丁寧に作ったって言った。はるちゃんも味に厳しいからって」

「ハハハ・イチゴのデコレーションケーキだったよ。友里と2人で食べたんだけど、コース料理の後だったし、すごくお腹いっぱいになった」

「ホント？その時電話でさ、誕生日くらい一緒にいてやれって怒られた」

「今井さんに？」

「そう。だったら、休めるようにもつと人を入れてくれって言ったけどね」

「あはは。今、調理場の人少ないんだよね？」

「んー……。あと2人くらい入ってくれと、俺ももう1日くらい多く休めるんだけどなあ」

「アルバイトの募集はかけてるの？」

「かけてるよ。いろんな求人誌に。でもなかなか、いい人材がねー。・。うちは勤務時間もハードだしね。『デイル』も先月1人辞めて、今井さんも休みなしって言ってた」

「今井さん、子供もいるのに大変だね。一緒に過ごす時間がないんじゃない？」

「そうそう・・・」

都市高速に入り、大好きな景色が見えてくる。

最初に見える空港には、ターミナルに向かって飛行機が何機も並んでいる。離陸した飛行機が、ゴオオンという音と共に、真横を空に向かって昇っていく。

空港の横を通り過ぎると、ビルが立ち並ぶ都心部へと入っていく。助手席の窓からクリニックがあるビルを見つけ、思わず窓ガラスに手をつけてしまう。

「どうした？」と、和晃がチラッとこっちを見て言う。

「ううん、別に」

ただじっと、ビルだけを目で追う。次々と通過していく景色の中で、そのビルだけが止まって見える気がする。

先生は、今日も仕事かなあ・・

誕生日の日、診療室を出るときに見た先生の顔を思い出す。

「ー・・・と思わない??」

和晃が何か言った。

「え？」

「ええーっ？聞いてなかったのお？」

「え？あ、ごめん。」

「はるか、最近なんか元気くない？」

「え？そお？」

「うん、なんか、時々うわの空っていうか。悩みでもあるの？」

「ううん、別にないよ。全然大丈夫」

「そう？」

「うん」

和晃を安心させる為に、笑ってみせた。

うわの空。

自分では気づかなかった。

和晃がいるときは、先生のことはなるべく考えないようにしていたつもりだった。

でも、やっぱり考えている。

常に。

心のどこかで。

30分弱で、都市高速を一周した。

ドライブの後は和晃の買い物に付き合い、夜は和晃の希望でイタリアンの店に行き、パスタを食べた。

久しぶりの休日を、和晃は満喫しているようだった。

4日後のクリニックの予約を前に、麻耶ちゃんに電話をした。

前田先生のことを話してみようと思った。

1人で思い悩んでいるより、誰かの助言が欲しかった。

例え非難されても、もう、想いを抱いている自分がいる。

『もしもし』

「麻耶ちゃん？」

『おおーはるちゃん』

「もう、仕事終わった？」

『うん、今、駅から家まで歩いて帰ってるとこやに。だいぶ寒くなつたなあ』

「んー、こつちも朝晩は冷えるよ。でも、今年は暖冬傾向だって言ってたよ。」

『あ、ホンマ？もう、ウチ寒いのが苦手なんさ。冬なんか来んでええわあ』

「あはは」

『どうしたん？今日は？』

「うん・・ちよつと、麻耶ちゃんに聞いてもらいたいことあって」「そうやる！？やっぱりな、この前の誕生日ん時も、なんかおか

しい思ってたんやんか」

「うん・・・」

「なん？」

「麻耶ちゃん・・・私・・・好きな人がいる」

「え？」

「いいなあって思ってる人がいて・・・」

「ちよっ・・・何？何かヤバイことしよるんちゃうやろな!？」

「ううん、何にもしてないよ」

「あ、そうか、だったらええけど・・・」

麻耶ちゃんが、深い息を吐いたのがわかった。

「片思いしてるだけなんだけどね・・・」

「うん・・・」

前田先生との出会い、これまでの経緯、先生のこと、先生を想っている自分のこと、全てを麻耶ちゃんに話した。

麻耶ちゃんは、ただ時々「うん」「うん」と頷いていた。

話し終わった後、返ってきたのは意外な言葉だった。

「素敵やなあ・・・はるちゃん」

「ー・・・え？」

「恋焦がれとるはるちゃんの言葉、なんか素敵やなあと思ったでさあ・・・」

「もつと・・・そんなのよくないって言われると思ってた」

「そう言うて欲しかったん？」

「・・・わかんない」

「ええやん。はるちゃん、結婚しとんのに1人でおること多いし、他の人に恋して、楽しむくらいええと思うわ。」

「和晃を裏切ってるよ・・・」

「でも、旦那のことも大事に思ってたんねやろ？」

「うん」

「ほなええやん。せつかく好きやって思ってるんやしさあ、その気持ち大事にしたらええやん。まあ、人妻やし、好きならどんどんい

つてまえーとまでは言われへんけどなあ』

「ー・・・うん・・・」

嬉しかった。

ただ嬉しかった。

先生を好きな気持ちは膨らむのに、どこか自分の不誠実な想いを否定していた。

好きでいたい。

先生を好きでいたい。

和晃には絶対に知られないように。

和晃をキズつけたりはしない。

ずっと隠し通す・・・先生への想い。

好きな気持ちを楽しむ。

前田先生を　好きな気持ち・・・。

クリニックに行く日は決まって雨が降る。

クリニックの入り口の傘立てがいっぱいなら、待合室のソファーも人で埋まっている。

座る場所すらなく、フロアの隅で立って待つことにした。

待っている間、診療室のガラス扉の向こうを通る、前田先生を2回見た。

今日は待ち時間も長かった。

30分ほど待って、助手の下山さんに名前を呼ばれた。

診療室は、いかにも忙しいという雰囲気漂っていた。

いつもの、癒しを思わせる空気は全くない。

6番ブースに案内され、下山さんが診療の準備をする。給水口に紙コップを置き、治療器具をジャラジャラと出し、スタイを首元に着けられる。フラットパネルモニターに、デジタル画像も出していた。

あれ・・・この写真・・・

自分のではない気がした。

背後に足音がし、「春日部さん、こんにちは」と、マスクをした前田先生が来た。

「こんにちは」と返したが、先生の顔に笑みはない。というより、私の顔など見てもいない。

モニターを見るなり、先生が言った。

「下山さん、写真が違う」

下山さんは慌てたように「すみません」と謝ると、モニターのリストから私の名前を探していた。

やっぱり、私の写真じゃなかった。

なんとなく、先生の言葉にトゲのようなものを感じた。

「春日部さん、シート倒すよー・・・」

シートを倒しながら先生は言う。

「今日は、上の奥にある、すごく小さいんだけど悪くなってる箇所があるから、そこを削って、白いもので埋めていくっていう治療をするからね。」

「・・・はい」

早口で、少し投げやりのような説明に戸惑った。

忙しくて、ゆっくり説明する余裕などないのかもしれない。

「顔に水がかからないように、タオルをかけますね」

下山さんはそう言うと、私の顔にそつとタオルを置いた。

一番嫌いな「削る時の音」が耳に響く。

全神経が、削られている歯に集中する。

「ちゃんと奥で吸引してあげないと!」

前田先生の、下山さんへの注意が飛ぶ。

先生の口調は明らかにキツイし、少しイライラしているように感じる。

一瞬、喉の奥に水が流れ込んできた。

歯を削られているにも関わらず咽てしまい、我慢できずに咳き込ん

でした。

「ああ、咳をするなら手を上げてくれないと！」

！・・・

前田先生はキツク言った。

「すみません・・・」

ズキンとした。

シヨックだった。

ズキン・・・ズキン・・・ズキン・・・ズキン

胸が苦しくなった。

泣きそうになった。

タオルの向こうで、先生はどんな顔をしているのか。

怒っているのか・・・想像するとコワくなった。

「下山さん、そっちも！」

前田先生は怒っている。

イライラしている。

多分、度重なる下山さんのミスに、以前の加護先生のように怒っているのだろう。

咳をしたのは確かに悪かった。

でも、手を上げる余裕などなかった。

あんな言い方しなくても・・・。

タオルが取られ、「うがいをして下さい」と、シートを起こされた。

先生の顔が見られなかった。

見るのがコワかった。

先生は、6番ブースを出て行った。

数分経って、女性の医師が入ってきた。

「では、削ったところを、今度は埋めていきますね」

残りの治療をしてもらっている時も、先生の怒った声が頭に響いていた。

どうしようもない気持ちでいっぱいだった。

いつも優しい先生から、あんな風に言われたことがショックだった。治療が終わると、女性の医師は「待合室でお待ち下さい」と言い、さっさとブースから去っていった。

1人、6番ブースに取り残された。ふと外を見ると、雨は激しくなっていた。

・・・早く帰ろう。

膝に乗せられていたひざ掛けをたとみ、ハンガーからコートを取り、バッグを持ってブースを出た。

出た瞬間、カルテを持った前田先生がいた。目が合った。

「春日部さん・・・」

先生は、気まずいような顔をしている。

会釈をして、先生の横を通り過ぎ、待合室へ歩く。

私はどうかしている。

「春日部さん」

結婚しているのに、この先生を好きになったりして。

「春日部さん」

やっぱり間違ってる。

「春日部さん」

この恋は間違ってる。

「春日部さん」

よかったじゃない。間違いに気づいて。

「……………はるかさん！」

……………

無意識に、足が止まった。

他の患者の治療に当たっている医師も、近くを歩いていた助手も、そこにいる誰もが、驚いた顔で前田先生を見た。
当然だ。

患者を、下の名前で呼んだのだから。

振り返ると、少し困ったような笑顔で前田先生は言った。

「おつかれさま……来週も来る？」

「……………」

私は頷いていた。

「お大事に。」

前田先生は笑った。
マスク越しに。

いつもより、控えめに。

先生との時間

クリニックからの帰りのバスを降りて、近くのスーパーに寄った。和晃は深夜に食事をする為、カロリーの高い料理はなるべく避けるようにしている。

厨房での仕事なら、「賄い」という従業員の食事があるのが一般的だが、和晃は自分の厨房では敢えてそれをしないようにしている。余った食材で料理を作るのも勉強のうちだという料理人は多いが、より良い食材で、より良い料理を作り、少しでも早く一人前の立派な料理人を増やしたいという和晃の考えからだ。賄いは時に、下で働く者たちのプレッシャーになることもある。「部下への思いやりがある」と、評判の和晃は、職場の同僚からも慕われている。和晃が家で食事をするのは、賄いがないというのも理由だが、昼も夜も職場で食事を摂るのは気が向かないらしい。

夕食の材料を買い込み、片手で傘を持ち、片方の腕にズッシリとした買い物袋を提げて家に帰る。夕方近くになると、冷たい雨と風で、より一層寒さを感じる。

買ってきたものを冷蔵庫や棚に入れて、裾の濡れたコートをハンガーに掛けて部屋に干す。お気に入りのバッグも湿っている。ファンヒーターのスイッチを入れ、温風吹出口の近くに置く。お湯を沸かして紅茶を入れ、リビングのテーブルの前に座り、CSのスポーツチャンネルをつけた。

ラグビー中継の録画が放送中だった。ラグビーの試合は、中継を観ていても静かだ。聞こえてくるのは、解説者の声と、選手の声、ボールの音、レフリーのホイッスル。

ボールをボックスへ展開し、グラウンドを走るスクラムハーフを目で追う。

前田先生と重なって見える。

「はるかさん」と呼んだ先生。

「春日部さん」と呼ばれて振り向かなかったのは確かに私・・・。

呼び止める手段だっただけで、他に意味はなかったのかもしれない。考えれば考えるほど、顔が熱くなっていく。

嬉しいような・・・。

照れくさいような・・・。

先生にキツイ言い方をされて、迷いが生まれた。

この恋は間違っている・・・。

でも。

迷いはほんの一瞬で、先生に名前を呼ばれ、笑顔を向けられ、「来週も来る？」と聞く先生にまた引き寄せられていく。

先生

先生

前田先生・・・

先生は、他のどの患者にも同じように接しているのだろうか？

他のどの患者にも、同じように優しい言葉をかけ、他のどの患者にも、その甘い笑顔をむけるのだろうか・・・

クワォーターバックがボールを持って走る。タックルをかわし、ゴールラインを越えグラウンディング。ホイッスルが響き、トライが決まる。

他の選手が、トライを決めたクワォーターバックに駆け寄り、抱き合って喜び合う。

きっと先生も、こんなふうにラグビーをしていた。

先生に出会わなければ、こんなにラグビーを知ることにはなかった。壁に掛かったカレンダーを見る。

来週、クリニックへ行く日。
先生に会える日が待ち遠しい。

晴れるといいなあ・・・来週こそは。

部屋干しした洗濯物に触れる。湿ったままの和晃のトレーナー。
今日は乾きそうにない。

夕食を作ろう。

和晃のために。

夕食には、和晃の好きなハンバーグを準備した。カロリーを考え、
材料には豆腐を使った。

料理に関しては厳しい面を持つ和晃のために、作り置きは一切しない。
何時になろうと、出来たてを食卓へ並べる。

和晃が帰宅したのは、早めの深夜1時だった。

職場で美味しく出来たからと、ビュッフェのデザートで出すタルト
を半分だけ持ち帰ってきてくれた。

「これね、キッチンの女の子が作ったんだけど、すごく良く出来て
たから、はるかに持って帰ってきたんだ」

「わあ、おいしそう」

ラ・フランスを表面に広げたタルトだった。

最初は嬉しかった。

でも、和晃は時々、家で職場の女の子をやたらと誉める。

「そのコ、まだ27歳なのにすごく頑張るコでさ、パティシエでも
ないのにデザートを良く研究してて、店に貢献してくれてるんだ」

「ふうん・・・すごいねー」

和晃が、私と歳が近い女の子を誉めると、どこか「それに比べてお
前はダメだ」と言われているようでキズつく時がある。和晃に悪気

がないのはわかってる。鈍感というのは時に残酷だ。結婚する前は、「いつか2人で店を持てたらいいね」と夢を語っていたが、私が主婦に納まったことで、調理師としては経験不足と見るようになったのか、そんな夢も語らなくなった。そして私自身も、和晃と仕事をしたいとは思わなくなっていた。

職場の女の子を誉めているだけならよかった。でもその夜は、私が作った夕食に軽くケチをつけた。

「今日のハンバーグ、何か変なニオイがする」

雨の中スーパーへ行き、新鮮な食材ばかりを使って、深夜にガスコンロの前に立ち、喜んでもらおうと作った料理なのに、そんな言われ方はいささか心外だった。

「どんなニオイ？」

「うーん、なんとなくなんだけど・・・」

箸で掴んだハンバーグを鼻に近づけ、ニオイを気にして口に入れようとしない光景に腹が立った。

「食べなくていいよ。残せば？」

思わず口から出た。

和晃はハツとしたような表情で「いや・・・食べるけど・・・」と言った。

誰がいるから、深夜に帰宅しても当たり前のように食卓に料理が並ぶと思っているのか。

毎日毎日、どんな気持ちで夕食のメニューを考えていると思っているのか。

職場の女の子を誉めた後に、私の料理にケチをつけたことで余計に腹立たしかった。

いつもなら、多少のことは聞き流すが、今日は異常に頭にきた。

準備に使ったフライパンなどの洗い物を済ませて、和晃を1人食卓に残し、お風呂に入った。

私がお風呂を済ませると、和晃も申し訳なさそうに後に続いた。喉が渴いて冷蔵庫を開けると、さっきのタルトが入っていた。

もはや全く食べる気になれない。
ミネラルウォーターのペットボトルだけを取り、ボタンと扉を閉めた。

『ええ〜！？はるかさんって呼ばれたん？』

3日ほど経って、仕事帰りに電話を掛けてきた麻耶ちゃんが驚きの声を上げた。

「うん・・・」

『うわうわ、ええなあ〜はるちゃん、嬉しかったんちゃう？？』

「うん・・・ビックリしたけど。でも、多分あれは咄嗟に出ただけだと思います。」

『まあ〜そやなー。呼び止める手段だっただけかもわからんな』

「うん・・・」

『次はいつなん？先生に会えるんは？』

「・・・あさって」

『へええ。楽しみなんちゃう？』

「うん・・・楽しみ」

『あはは！素直やなあ〜。うんうん、ええこつちゃ』

「麻耶ちゃんは？デートしてる？」

『デートなあ〜、したいねんけど、今ちよつと、彼氏よりもウチの方が仕事忙しくてさあ、土日もないねやんかあ』

「えーっ、じゃあクリスマスも？」

『そうやなあ。クリスマスぐらいはデートしたいなあ』

「年は？」

『30やに』

「じゃあ、4つくらい上なんだね」

『ん〜やつぱ、年上の方が甘えさせてくれるでな。先生は？いくつくらいなん？』

「わかんない・・・けど、さんじゅう・・・1・・・2・・・歳かなあ」

『へえ〜そうなんや。そのくらいでもう院長の肩書きとか貰えんね』

やな。』

「そうみたい。ホームページのスタッフ募集要項のところに、経験5年以上で分院長って書いてあった」

『5年かあ。ウチの知り合いの旦那が歯科医やってる人がいてるねんけどさあ、歯科大って、臨床とかあって6年くらい行かなあかんのやろ?』

「うん・・そうらしいね。それで院長ってことは、経験は5年以上あるってことだから・・」

『そうやな。やっぱ31〜32歳やろうな』

「んー・・」

『もつといろいろ話できたらええねやろうけどなー・・歯医者ってなかなかそうもいかんよなあ』

「うん。治療についての話ばかり」

『相手が相手やからなあ』

「でも、麻耶ちゃんが言っただみたいに、気持ちを楽しむことにしてるよ。」

『そうやな。気持ち、大事にしたらええのよ』

「・・・うん」

『まあ、ウチも何かと忙しいねんけど、いつでも電話してな』

「うん、ありがとう。麻耶ちゃんもあんまりムリしないでね。」

『おう、サンキュー。ほな、またな〜』

「うん」

晴れるといいなと思っていたクリニックの予約の日。朝、アラームで目覚めると、カーテンからこぼれる太陽の日差しに、気持ちが高鳴るのを感じた。

先生を好きになって、それまではなんでもなかったことが嬉しかったり、楽しかったりするようになっていた。

夕方17時の予約が待ちきれず、着て行く服を何度も選んだり、診察券の裏に書かれている予約の時間の欄を眺めたりした。

バスに乗るころはすっかり日が暮れていた。

この時期は、日が落ちるのも早い。

駅前の至る所でイルミネーションが光り輝き、街はクリスマスムード一色だ。

歩道を吹きつける冷たい風に寒さを感じながら、クリニックのあるビルへと歩く。

クリニックに入ると、思ったほど忙しそうではなかった。

会えるのが楽しみだったというのと、先週、「はるかさん」と呼ばれて以来、先生と顔を合わせるのは初めてで、胸の鼓動はトクトク鳴りっぱなしだった。

診療室から前田先生が出てきたときは、今までにないくらい心臓は早く、トクトクはドキドキへ変わる。

「春日部さん、こんばんはっ」

いつもの笑顔、いつものキマツた白衣姿で、カルテを片手に私を呼ぶ。

「こんばんは」

緊張を隠しながら笑顔を返す。

「寒くなかった？外は」

半歩前を歩く先生が、振り返りながら話しかける。

「寒かったです」

「夕方冷え込むようになったよね」

「そうですね・・・」

他愛ない会話がたまらなく嬉しい。

診療台に座り、先生も右隣に座る。モニターのX線写真で、治療する場所を指差した。

「えーっと・・・今日治療するところはね、右下の奥なんだけど、ちょっと深く削ることになるんだよね・・・」

右手に持っていたペンを自分の額にコツコツあてながら言う。

「削るとね、型をとって、インレーっていう被せものをするんだけど、春日部さんは今のところ、金属のインレーは1箇所もないし、今回は、春日部さんさえ良ければ、セラミックインレーっていう、白い被せもの作ってやっていこうと思っているんだけどどうかな？」

「あ・・・はい。先生にお任せします。」

「セラミックの場合は保険が適用されないから、ちょっと高額になつてくるんだけど大丈夫？」

「はい、大丈夫です。」

先生はふつと笑う。

「うん、よかった。せつかく白い歯が揃っているし、審美的にはこっちの方がいいと思うからね。」

削るときに痛まないようにと麻酔をされ、この前のようにタオルを掛けられ治療を受けた。

前田先生は、時々手を止めて声をかける。

「大丈夫？」

「痛くない？」

「もう少しだからね・・・」

先生の表情は見えなくても、言葉に“優しさ”を感じる。

頭に、先生の胸元やネクタイが触れる。

“先生”を感じる。

シートを起こされ、うがいをする。

先生はゴーグルを耳に掛けたまま額の上に押し上げ、カルテにペンを走らせる。

ゴーグルと一緒に前髪が上がり、先生の輪郭がクリアになる。

額から高くのびた鼻にマスクのラインが交差し、その凛々しさに“男性”を感じる。

「春日部さん、少し、時間ある？」

前田先生はマスク越しに小声で言う。

「え・・・？」

「今日は、あと1人患者さんを診たら終わりなんだけど、よかったら少し付き合ってもらえませんか？」

先生はやわらかく笑う。

真っ直ぐな視線に引き寄せられる。

「・・・はい・・・」

胸の鼓動は最速になる。

「それじゃあ、駅前の『ブレイク』で待っていてくれる？」

「・・・」コクンと頷く。

先生はススツと鼻を鳴らして笑った。

「じゃあ、あとで」と言い、先生はブースを出ていった。

思いも寄らない先生からの誘い。

動揺のあまり、放心していた。

ブースに助手の女性が入ってきてハツとした。

「おつかれさまでした。待合室でお待ち下さいね。」と言われ、コートとバッグを持ってブースを出た。

2つ隣のブースで、最後の患者の治療に当たる先生の後ろを通る。

胸のドキドキは、もう限界。

来週の予約を取り、クリニックを出る。

エレベーターに乗って、深い息を吐く。

なんだろう・・・どうして私を誘うんだろう・・・

喜びと緊張で、足に力が入らない。それでも平静を装って『ブレイク』まで歩く。駅前で人気のコーヒーショップ『ブレイク』は、通りに沿ったガラス張りの店で、いつもたくさんのお客で溢れ、店の近辺はコーヒーの薫りが漂っている。

店に入り、カフェモカを注文して、外が見渡せる奥の2人掛けのテーブルに座った。隣には、教科書のようなものを開いて黙々とノートに向かう若い女性が座っている。カフェモカの薫りを鼻で感じな

がら、外を見る。胸のドキドキは鳴り止まず、座っているのも精一杯だ。

今、先生を待っているという自分が信じられない。
外を行き交う人を、左右に何度も目で追う。

白衣を着ていない先生と会える。

どんなかんじだろう？

いろんな想像が頭をよぎる。

20分ほど待ったところで、通りを歩く先生が見えた。
白衣の下に着ていたシャツとネクタイの上に黒いブレザー、大きめの重たそうなビジネスバッグを持っている。

店に入った先生は店内を見回し、私を見つけると軽く左手を上げて合図した。

微笑み混じりに頷く。

注文したコーヒーが載ったトレイを持って、先生は近づいてくる。

「お待たせ。ごめんね」と笑顔で言うと、トレイをテーブルに載せ、向かいに座る。座るとすぐに、先生は私のカフェモカのカップを左手で握った。

「うん、OK。熱くはないね」

「え？」

「さつき、麻酔をしてるからね。熱いものを飲んで、火傷してたりしたらと思って、ここを指定したのはマズカッタなって思った」
ホッとしたような顔をして言った。

「ああ・大丈夫です。まだ飲んでないから」

「あ、ホント？よかった」

先生はコーヒーを一口飲んだ。

それをじっと見つめる私に、先生は話し始める。

「あ・・実は、明日の午前中から東京で歯科学会のセミナーがあつてね、これから夜の便で発つんだけど、飛行機の間までまだもう少しあるから、それまで春日部さんとお話できたらって思つて・・」

「え？これから東京に行くんですか？」

「うん。でも、明日の夜にはもうこつちに戻るけどね。」

「そうなんですか・・大変ですね・・」

「んー、まあ、学会はよくあるから慣れてる」

「そう・・ですか」

ぬるくなつたカフェモカを飲む。右下に感覚がないのを改めて感じる。

「この前、せっかくラグビーの話をしてくれたのに、院内じゃ殆ど話せないからね」

「あ・・それでわざわざ・・」

「ううん、春日部さんにラグビーのこと教えてあげようって思つてたんだけど、話す機会も少ないし。」

「そうですね・・ありがとうございます」

先生はずっと、私の方を向いている。

両肘をテーブルの上に置き、腕を組んで、時々コーヒを飲む。

「先生は、いつからラグビーをされてたんですか？」

「小学校2年生の時からかな。地元のジュニアチームに入つててさ。でも、僕は体が小さかったから、初めは全然ダメだったんだけどね。」

「へえ・・」

「最近見るようになったつて言つてたよね？」

「あ、はい。でも、トップリーグとか見ても、選手の名前とかは全然わからなくて、詳しくないんです」

「そっかあ。トップリーグもいいけど、高校とか大学ラグビーから見てもいいよ？」

「学生さんたちのラグビーですか？」

「うん、年末年始はラグビーの試合、たくさんあるよ。地元の高校

とか出てゐるなら応援もやりやすいし、トップリーグは、学生の頃から有名だった選手もいっぱいいるしね。高校ラグビー観てたら、上手い奴はやっぱり際立ってるし、自然と選手の名前もわかるようになるよ」

先生は、クリニックで仕事をしている時とは違う、無邪気な表情でラグビーを語る。

「僕は残念ながら、ラグビーでは食べていけなかったけど」
はにかんだ笑顔を愛おしく感じる。

「ラグビーをやってる先生も見てみたかったです・・・」

「ハハッ・・・。最近はずいぶん忙しくて、ボールも触ってないなあ・・・」
聞きたいことはたくさんあるのに、なにもコトバにならない。

目の前で笑っている先生を、見ているだけでよかった。

このまま時間が止まってしまえばいい。

このまま

今のまま・・・

『ブレイク』を出て、駅に向かって先生と並んで歩く。

「何時なんですか？飛行機・・・」

先生は腕時計を見る。

「19時50分。これから地下鉄で空港に行けばちょうどいいかな・・・春日部さんは？」

「私はバスです。すぐそのバス停から」

バス停を指差すと、先生はそっちへ歩き始めた。

「じゃあ、バス停まで」

「えっでも・・・」

「いいから」と、微笑む先生について行く。

イルミネーションを眺めながら先生は言う。

「もうクリスマスかあ……。早いなあ……。1年。」

「ふふっ、どうしたんですか？」

「やあ、30過ぎると、毎日1日が過ぎるのが早くてさあ」

「そうなんですか？」

「んー。春日部さんも今にそうなる」

「あはは」

「ホントだって」

バス停の少し手前で立ち止まる。

また時計を見て、先生が言う。

「バス、ある？」

「あ、ハイ。大丈夫です。」

「痛くない？」

先生は右手で頬を指差して言った。

「……ハイ」

「うん。よかった。じゃあ……。今日は付き合ってくれてありがとうね」

ビジネスバッグを右手に持ち替えながら、先生は笑った。

「いえ……。こちらこそ、ありがとうございました。」

「それじゃあ、また……。来週？」

「あ、ハイ……」

「うん。じゃあ」

先生は左の手のひらを向けると、駅構内へ向かって歩き始めた。

先生の後姿を見つめる。

後姿をずっと見つめる。

先生は一度振り返った。

思わず、微笑んでお辞儀をすると、先生は左手を高く上げて軽く手を振りながら笑った。

行き交う人で、先生がだんだん見えなくなる。

先生が見えなくなっていく。

先生

先生

前田先生。

先生が好きです。

私はこんなにも・

先生が好き。

先生との約束。

「明日の夜？」

「うん。俺、休み代わってもらったから。」

出勤前、歯磨きをしながら和晃が言った。

和晃の両親が、たまには一緒に食事をしたいと言っているらしい。

私の誕生日には、忙しいと言って休みなど取らなかったくせに、両親の頼みごととあらば、無理をしても休みを取る。

洗濯物のＴシャツをハンガーに掛けながら、イライラするのを抑えて尋ねた。

「どこで食事するの？」

「んー、母ちゃんたちは俺たちに任せるって言ってるんだけど、どこにしようか？また『デイル』にする？」

「『デイル』？いいけど、今井さんに迷惑にならないかな？またサービスとかしたりして、返って気を遣わせるんじゃない？」

「今井さんには俺が電話しておくよ。サービスとかはしなくてもいいってちゃんと言うから」

「言っても今井さんはすると思うけど」

洗面台でうがいを済ませた和晃が玄関へ向かう。

見送りの為、私も玄関へ行く。

靴を履いた和晃が振り返り、私の頭をポンポンと撫でる。

「ごめんね。急な話で」

「・・・」

「いつてきまーす」

「・・・いつてらっしやい」

機嫌が悪くなった私から逃げるように、和晃はそそくさと出掛けていった。

洗濯物の続きを始める。

和晃の仕事が忙しいせいで、私と和晃が揃ってご両親と会うことなど、年に何度もない。

お義母さんは、やはり息子の顔見たさなのか、年に1〜2度は必ず食事に誘ってくる。和晃のご両親が絡む時は、私がどんな時よりも“現実”を感じる時だ。

長男の嫁。長男の妻。

自分の立場をイヤと言っばと思ひ知らされる。

洗濯物を干し終え、まだ寒いベランダに立ち、外を眺める。

ベランダからは、マンションのすぐ向かいにある保育園や、遠くまで延びる新幹線の高架、それを囲むように立ち並ぶビルやアパート、地元の公立高校も見える。通勤や通学で歩いている人々、保育園に登園してきた親子、誰もが急いでいる時間。

それを余裕でベランダから見ていられる主婦の私は、きっと“幸せ者”なのだろう。

その“幸せ”をもたらしてくれているのは、他の誰でもない和晃だ。

なのに私は・・・

ため息は、白くなって一瞬で消える。

全身に寒さを感じ、洗濯かごを持って部屋に入る。

毎日と晃の為に尽くし、家事をこなしている自分と、前田先生を想い、胸をときめかせている自分は、全くの別人なのではないかと思ってしまう。

別人ならよかったのに・・・とさえ、思ってしまう。

「あら、はるちゃん、髪、随分短くなつたねえ」

「あ・・ハイ。先月切つたんです。」

『デイル』の前で待ち合わせていたお義母さんが、私を見るなり挨拶もせずと言った。お義母さんの隣には、早く着いておきながら、

待たされた気になっているお義父さんが立っている。

「こんばんは。ご無沙汰してます、お義父さん。」

ご機嫌を取る為に愛想笑いをする。

「あー・待ってたよ。」

「待ってたって、そっちが早く着いてただけだろ」

和晃は呆れながらお義父さんに言う。

少しムツとしたような顔をして、お義父さんはさっさと『デイル』に入っていく。

私はお義母さんと一瞬目を合わせて、お互い苦笑いしながら後へと続いた。

和晃とお義父さんは、もともとあまり仲が良くない。

お義父さんは、世に言う典型的な頑固オヤジで、亭主関白な上に融通も利かない。思い通りにならないければ齒に衣着せぬ悪態をつき、そのくせ外面は拔群に良い。家庭ではいつもお義母さんを困らせていたお義父さんを、和晃はひどく嫌っていた。和晃はいつも、「オヤジのようにはないたくない」と言っているが、私から言わせてもらえば、和晃も最近はお義父さんに似てきたところがあると思う。けれど、和晃のプライドを尊重して、そこは言わないようにしている。

4人掛けのテーブルで、私と和晃は手前の椅子に、お義父さんとお義母さんは奥の長椅子に座った。メニューを見ながらみんなで飲み物を選んでいると、背後から「いらっしやいませ」と声がした。

今井さんだ。

和晃が振り向き、即座に「おつかれっす」と挨拶した。

私が「こんばんは」と言うと、今井さんは首だけをクイと突き出して「この前はどうも」と笑った。

お義父さんとお義母さんは立ち上がり、「息子がいつもお世話になってます」という型に嵌った挨拶をしていた。

和晃の両親の挨拶に恐縮気味だった今井さんは、和晃と私が座る椅子の背にそれぞれ手をかけ、真ん中に立って和晃と仕事の話を始め

た。発注先の商品がどうだとか、近々料理長だけが集まるミーティングが予定されているとか、私は右耳で聞きながらお義母さんと料理を選んでいた。

話が終わると、「じゃあごゆっくりね、はるちゃんも」と、私の肩をポンとたたいて調理場へ戻って行った。

料理が運ばれ、乾杯をする。

そして、さあ、くるぞ。あの話が・・・と、気合を入れる。

サラダを食べ、グラスビールをすでに半分空けているお義父さんが私に話しかける。

「はるちゃん・・・まだ出来ない？」

来た。

「あー・・・すみません。まだですねー・・・」

「もう結婚して2年近く経つのになえ」

しつこいお義父さんに和晃が言う。

「俺が忙しいんだから仕方ないだろ。はるかが悪いわけじゃないんだよ」

それを聞きながらお義母さんが、私を見て尋ねる。

「でも、はるちゃんだって早く赤ちゃん欲しいでしょう？」

「んー・・・今は、和晃さんの帰りも遅いし、和晃さん自身が子育てに協力できる状態じゃないですしねー・・・今はなんとも・・・」

「和晃の仕事の時間はもう少し減らせないの？」

「簡単に言っなよ」

和晃は左肘をテーブルにつき、ふてくされたようにワインのグラスを傾ける。

いつもこのパターンだ。私に妊娠の兆しがないかを確認め、ないとわかれば和晃の就業時間が長いのが悪いと言う。

結婚してからというもの、何度同じ会話が繰り返されてきたことか。子供は自然に授かれればいいと、初めは思っていた。でも、ここ最近、今は欲しくないと強く思うようになっていて。

心で前田先生を想っているのに、和晃の子供を身籠る気になんてなれない。

心と体を区別するようなこと・・・出来るわけない。

『デイル』を出ると、お義母さんがささず私に言った。

「はるちゃん、大晦日はお願いしますね」

「あ、はい。伺います。」

「じゃあねえ、はるちゃん」

アルコールが入り、すっかり気分が良くなっているお義父さんの腕を引っ張り、お義母さんはタクシーを拾った。

和晃の代わりにハンドルを握り、夜のバイパス線を車で走る。

赤い顔をして、助手席にぼんやりと座る和晃に、思い切って言った。

「ねえ、和晃」

「うん？」

「私ね、本当に今は、子供欲しくないんだ」

和晃はふつとアルコールのにおいをさせながら笑い、右手でポンポンと私の頭を撫でる。

「わかってるよ。俺も別に、はるか二人でも全然楽しいし。そこまで拘ってないし」

「そう？」

「うん。オヤジたちは、俺が長男だからうるさいけど、はるかは気にしなくていいよ」

「・・・うん」

和晃の忙しさを理由にしていることが、やっぱりどこか後ろめたかった。

本当の理由を、正直に言えるはずもないけど。

駅前のバス停で降りてクリニックへ向かう途中、サンタクロースの

格好をした若い女性が、小袋に入ったキャンディーを道行く人に配っていた。サンタクロースの格好と言っても、下に穿いているのはかなり短めの赤いスカートで、見ているこっちまで寒くなる。横を通ると、彼女は私にも近づいてきて、「キャンペーン中でえす」と、営業スマイルと共にキャンディーを差し出した。私が受け取ると、彼女はまたすぐ別の通行人の方へ行ってしまった。キャンディーの袋には、携帯電話会社のクリスマスキャンペーンのプリントがしてあった。

クリスマス・・・

先生はどんな風に過ごすんだろう？

やっぱり、彼女がいたりして、二人で・・・？
・・・

全くリアリティーのない想像をかき消して、ビルに入った。

クリニックに入ると、受付カウンターの前に小さなクリスマスツリーが飾られていた。赤、青、緑のライトが、ピカピカと交互に光を放っている。待合室のソファーに座ってツリーの方を見ていると、診療室から助手の下山さんが出てきて私を呼んだ。

また、下山さんが助手に付くのかな・・・と、すこし沈みそうになりながら4番ブースへ案内された。

診療の準備を済ませると、下山さん自らシートを倒し、右下の削った歯に詰めていた白いものをキュレットを使って取り外してくれた。シートを起こされ、「うがいをしてお待ち下さい」と言うと、下山さんはブースを出て行った。

舌で歯に触れると、見事に削られているのが感じて取れる。

数分経って、前田先生が来た。

「春日部さんっ」

振り返ると、青いマスクをした先生が微笑みながら近づき、右隣に座る。

胸がトクトク鳴り始める。

「こんにちはっ」

「こんにちは・・・」

「この前はありがとうね。」

「あ、いいえ・・・こちらこそ・・・」

「うん。」と、マスク越しの笑顔で“それ以上この前の話はできないけど”と言われている気がした。

ただ、笑顔を返した。

「じゃあ、今日はインレーを嵌めていこうね。」

先生はカルテを確認してからシートを倒した。

ライトを口に当てる。

「ハイ、開けてー・・・」と、先生の顔が近づく。

先週、少しだけ先生と一緒に過ごしたせいかわ、それまでとは違って、緊張しているようで、でもどこか落ち着いていた。

インレーを、削った歯に充ててみる。1度できっちりとは合わないらしく、先生は何度もインレーを削って歯に合わせていく。

「ちょっと、カチカチーって噛んでみて？」と言われ、その通りにしてみる。

「高さはどう？」と聞かれる。

少し、右顎が浮いたようなかんじがして「高いです」と答える。

「まだ高い??? なんかトライならず! ハイッ、開けて〜」と、ラグビーのトライに懸けた冗談をクスクス笑いながら言う。

「フフフッ」と思わず笑ってしまう。

先生は何度も微調節を繰り返す。途中、「疲れてない?」と聞きながら。

赤い咬合紙をピンセットで掴み口に入れる。

「ハイ、噛んでみてー」と言われ、カチカチと顎を動かす。

「どお?」

「大丈夫です。」

「うん、よし! トライ成功〜」

セラミックインレーを嵌め込むと、手鏡を渡された。

「見てみて」と言われ、口を開ける。

先生は、ミラートップの先で治療した歯を指し、「ココ。ね？審美的にもいい感じでしょ？」と、得意気に言った。

「はい」と笑って頷いた。

「うん。よし、じゃあうがいをどうぞー」とシートを起こされる。

先生は私の胸元のスタイを外し、カルテを持って右隣へ座る。

「春日部さん・・・今日で一応、すべての治療は終了なんだけど・・・ドキンとした。

「他に気になるところとかないかな？」

ずっと通えるわけじゃないとは思ってたけど

こんなに突然終わるものなんだ・・・

「はい・・・」

どうしよう

もう、先生に会えなくなる

「うん。」

先生はマスクを外す。

「えっとね、4ヶ月くらいしたら定期検診のハガキを送るから、また、お口の中の状態を診せて下さいね。」

しばらく会えない

4ヶ月も・・・会えなくなるの・・・？

先生は優しく笑う。

頷いて、微笑み返す。

「また、何かあったらいつでも来てね。僕が診てあげます」

「・・・はい」

思わず俯いてしまう。

多分、私は今、がっかりした表情をしていると思う。

前田先生は、ブースの入り口の方を一瞬見た。

「それとね、これ、今度の26日なんだけど・・・」

先生は小声で言うと、白衣の内側からチケットを2枚取り出し、私に手渡した。

ジャパンラグビー・トップリーグ レギュラーリーグ と、書かれている。

驚きで、声を失ってしまう。

胸がドキドキ高鳴る。

チケットをじっと見ている私に先生は言った。

「よかつたら、二人で行きませんか？」

行きたい

先生は、微笑んで私を見ている。

「・・・はい、行きたい・・・です」

先生は笑って頷く。

「競技場、わかる？」

「あ・・・はい」

「うん。じゃあ、西ゲートで13時半に」

「1・・・」

先生を見たまま頷く。

ブースを出て、待合室へ歩く。

「春日部さん」

振り返る。

「おつかれさまでした。お大事に。」

笑って立っている先生に、笑って会釈を返す。

治療は終わったけど、まだ会える。

先生にまた会える。

二人で会える・・・

帰りのバスに揺られながら、先生に渡されたチケットを手取る。

チケットを眺めながら、「二人で行きませんか？」と言った前田先生を思い出す。

嬉しくて　嬉しくて

胸はまだドキドキしている。

でも、夢のような気分も束の間・・・

自分が降りるバス停の車内アナウンスにハッとする。

どうしよう

和晃には何て言おう・・・。

26日は、朝からよく晴れていた。

ラグビーの試合は14時キックオフ。

少し早めの昼食を済ませて、おしゃれにも時間をかけて家を出た。

今日のことを、麻耶ちゃんに相談しようと思ったつもりだったが、いろいろ考えて、やっぱり相談はしなかった。

自分で考えて、自分の意思で、自分で決めた。

今日は、高校の時の友人・友里とラグビー観戦に行くと言ってある。

私は和晃に嘘をついた。

出勤前、「ラグビー、楽しんでおいでね」と言い、私の頭をポンポンと撫でた和晃。

不思議と罪悪感は湧いてこなかった。

世の中に、浮気や不倫が蔓延している理由が、初めて理解出来た気がした。

私は、好きな先生とラグビーの試合を観に行く。

二人で。

でも、多分私の片思いで、付き合っているわけではない。

これは浮気になるのだろうか？

どこからが浮気なのだろう？

夫に嘘をついた時点で、やっぱりアウトだろうか？

競技場には、たくさんのラグビーファンの姿があった。チームのサポートグッズを手に、続々とゲートから流れ込んでいく。

西ゲートに着いたときは、13時半を少し回っていた。

人ごみの中を見渡しても、先生の姿はまだない。

ゲートに入っていく人の邪魔にならないように、少し離れた所の壁際に立って待つことにした。

携帯電話で時間を見る。

13時45分。先生はまだ来ない。

13時55分。キックオフ5分前。先生はまだ来ない。

ゲート周辺も、人は疎らになってきた。

何かあったのかな・・・？

場所、間違っていないよね・・・

2〜3歩歩いて遠くを見ても、先生は見えない。

14時。試合は始まり、ゲートに立っているチケットを確認するス

タッフがこつちをチラチラ見ている。

私だって中に入りたいよ・・・

コートのポケットに手を入れ、下を向く。

ゲート側は日陰になっていて、スカートの中に入ってくる風は冷たい。少し寒くなってきた。

14時15分。

遠くから、黒いダウンジャケットにジーンズを穿いた前田先生が、走ってくるのが見えた。

思わず、走って駆け寄る。

「春日部さんっ・・・ごめんっ・・・」

先生は額と鼻の頭に少し汗をかいて、息切れしながら謝った。右手には、グレーのダウンジャケットを持っている。

「どうしたんですか？大丈夫ですか・・・？」

膝に手について、息を整えようとする先生に聞いた。

「うん・・・ごめんね・・・遅くなった・・・午前中だけ・・・診療があったんだけど・・・最後の患者に手こずってさ・・・着いたら着いたで、駐車場がなくて、探し回ってたら遅くなった・・・ごめん・・・」

「いいんですそんな・・・大丈夫ですか？」

「うん・・・。っていうか春日部さん、寒いでしょ・・・？」

先生は、まだ切れた息を静かに吐きながら近づき、持っていたダウンジャケットを私に羽織った。

「ラグビーはこういうの着て観ないと、寒いからね・・・」

胸元でダウンを両手で閉めて、目の前で優しく笑った。
ダウンの襟元から、ほんのりクリニクのおいがした。

「あ・・・りがとうございます」

ドキドキする。

先生のダウンで、体が少しずつ暖かくなっていく。

「行こう。もう試合始まつてるね」

先生は、左手で私の右手を掴んだ。

「わっ、冷たくなってる！」

「……………」

先生に引つ張られて、ゲートへ走る。

男性にしては、白くて細い指をした手だと思っていたのに、右手を掴んでいるその手は、力強い、男の人の手だった。

あたたかい、先生の手。

メインスタンドのやや端の方に座り、グラウンドを眺める。

初めて観る生のラグビー。

となりには前田先生。

試合は、前半25分を過ぎたところで、7 - 0。地元のチームは、相手チームに1トライと1コンバージョンをリードされていた。

「あ……………負けてる」

棒読みで先生が言った。

「ふふっ でも、まだ前半ですし」

「うん、まあそうだけどね」

ニヤツと笑う。

「あ、春日部さん、ハイ」

先生はポケットから缶コーヒーを取り出して、私に手渡した。

「あ、すみません……………」

手のひらにコーヒーの熱が広がる。

「いやいや……………こっちこそホントにごめん。試合、ちゃんと最初から見せたかったのに」

「いえ、連れてきてもらっただけで充分です。」

先生は、ダウンの襟に顔をうずめながら笑う。

「そう？」

「はい。」

試合を観ながら、先生は地元のチームの動きに時々“突っ込み”を入れる。

「あー・・・そっちにパスしてどうすんだよ」

「走れってそこ！」

「なんでレフトが出てこないんだよ」

試合を観ているより、先生を見ている方がおもしろい。

「ふふっ」

思わず吹き出した私の方を、先生は振り向いた。

「ん？」

「いえ・・・おもしろいなーと思って」

「おもしろい？」

「はい・・・なんか、病院にいるときは全然違いますね。」

「ハハッ・・・そうかな。観に来たのも久しぶりでね、ちよつと興奮気味」

「アハハ、確かに興奮してますね」

前半は7 - 0のまま、ハーフタイムに入った。

「大丈夫？寒くない？」

先生は少し心配そうに聞く。

「はい、大丈夫です。私コートも着てるし。」

「そっか。」

先生は、笑うと立ち上がった。

「ちよつと待っててね。」

「・・・はい」

先生は他の観客を縫って、スタンドを出て行った。

広いグラウンドを眺める。

グラウンドの両端に立つラグビーの象徴、ゴールポスト。

やっぱり・・・先生がラグビーしてるのも見てみたかったな・・・

サイズが大きくて、手が出ていないダウンの袖口を見る。

先生のおいがする。

先生に包まれているような錯覚を覚える。

先生は、ファーストフード店の紙袋を持って戻ってきた。

「おなか空いたでしょ？ハイッ」

紙袋からハンバーガーを取り出すと、私に差し出した。

「わー！いただきます。」

先生は足を開き、太ももに肘をつけてハンバーガーを食べる。小柄な割に、食べっぷりは豪快で、口いっぱい頬張っている横顔は、元ラガーマンを思わせるには充分だ。

「あ、そういうば、インレーはどう？物が食べ辛いとかない？？」

「はい、大丈夫です。」

「そう？よかった。昨日はねー、インレーの合わない患者さんがいてね、あんまり合わないから技工の人まで呼んだんだけど、それでも結構時間掛かつちゃって、その患者さん、何か約束があったみたいでね、『今日はもういいです』って言うから、結局また埋めて、途中で帰っちゃった、ハハハハ・・・」

「えっ、帰っちゃったんですか？」

「そう。ほら、昨日、クリスマスだったしね。悪いことしちゃった」

「あー・・・そっか。クリスマス・・・。歯医者でそんなに時間掛かると思ってなかったんでしょね。」

「んー・・・。そんな大事な用事の前になんで治療に来るかなあ」

「アハハッ、それ、らしからぬ発言ですね。」

「ハハッ、ホントだ、まずいな。守秘義務があるのに。免許剥奪かな？」

「ハハハッ、そんな大袈裟な・・・」

「しかも、昨日、診療が終わってからツリーの片付けとかさせられ

てねー・・・」

「アハハハ・・・」

先生と、こんなに楽しい会話をしたのは初めてだった。

試合は12-0。後半でさらに1トライを許し、地元のチームは負けてしまった。

競技場を出て、先生と並んで歩く。

「負け試合だったね・・・ごめん。」

「そんな、先生が悪いわけじゃ・・・」

「んーでも、せつかくなら、地元が勝つ試合を見せたかったな・・・」

「いえ、ホントに・・・ここに来ただけで充分です。」

先生は微笑んでいる。

「送っていくよ。僕、車だし」

「え、あ、でもそんな」

「ホントは、これから食事にも連れて行ってあげたいところなんだけど、まだカルテの整理が残ってて、またクリニックに戻らなきゃならなくてね」

「あつ、だったら尚更いいですつ・・・」

「いいから。せめて、送らせてください。」

真っ直ぐ、私を見る先生。

「あ・・・じゃあ、駅前までお願いします。」

「うん。」

先生の車は、“さすが医者さん”と思わせるような、高そうな四駆の黒い輸入車だった。

窓から中を覗くと、助手席には脱ぎ捨てたような白衣が置いてある。先生は運転席に座ると、白衣を後部座席に放り投げ、「どうぞ」と、私を助手席へ促した。

「失礼します・・・」

脱いだダウンジャケットを先生に手渡し、助手席へ座った。
スツキリとした車内は、白衣があるせいか、やっぱりクリニクの
においがする。

車内では、小さい音量でラジオが流れている。
ハンドルを握る先生の横顔。

運転席に座っているのが和晃ではないことが、どこか信じられない。
聞きたいことを、コトバにできない。

たくさんあるのに、聞いてもいいのかわからない。

競技場から駅前までは、20分ほどで着く。

駅近くの信号で止まり、先生が口を開いた。

「楽しかった？ラグビー」

「ー・・はい。楽しかったです。」

「うん。それはよかった。僕も、春日部さんとラグビーを観られて、
楽しかったです。」

照れくさくて、思わず俯いて笑う。

『続いてのナンバーは、オーストラリアのシンガーソングライター、
Delta Goodremで、Last Night On Earthです。どうぞ』

ラジオから、DJの曲紹介が聞こえ、バラードが流れる。

駅前で、先生は車を止めた。

「ここで大丈夫？」

「はい、大丈夫です。」

「うん。今日はありがとう。」

「いえ、こちらこそ、ありがとうございました。」

先生は、優しく笑う。

それに応える。

「また、春に会おうね。はるかさん」

はるかさん と 呼ばれた。

車内に流れるバラードが、先生の笑顔と共に心に焼き付いていく。

「気をつけてね」

「はい」

助手席を降りて、ドアを閉める。

先生は窓越しに私を見て、左手を軽く振った。

先生の車が、たくさん走る車に紛れて消えていく。

「春に会おうね」と言った先生。

また会える。

この約束があれば

きっと先生と

また会える。

会えない先生。

12月末、CSの番組表を見ると、スポーツチャンネルはラグビー中継が目白押しだった。全国高校ラグビーフットボール大会、大学選手権。スポーツチャンネルのホームページには、高校ラグビーの見どころや、大学選手権トーナメントの途中結果が掲載されていた。地元代表の高校が、実は全国的にもトップクラスの強豪校で、トーナメントではAシード校になっていること、某有名私立大学に、過去に何人もスポーツ推薦で進学していることを知った。地元の高校が、あまりにも素晴らしい成績を出し続けていることに驚いた。そして、それを今まで全く知らなかった自分に、半分呆れた。大学ラグビーは、関西や関東地区の有名大学が圧倒的な強さを持ち、地元の大学はそれほどいい結果は残せていないようだった。

一般的に、年末の大掃除は家族で大晦日にやることが多いが、年を越す準備も、基本的にはいつも私1人でやっている。毎年、クリスマスを過ぎたらすぐに大掃除を始める。多忙な時期に突入した和晃は当てにできない上、大晦日は和晃の実家に拘束される予定だ。大掃除は、30日までに終わらせるというのが、私の中での決まりごととなっていた。

いつもはMDプレイヤーで好きな音楽をかけ、ひたすら掃除に没頭するが、今年はテレビをつけっぱなしにして、高校ラグビーの中継を観ながらやることにした。

布巾を片手に、テレビの前で手が止まる。

高校生は社会人と違い、全員がヘッドキャップを着けて試合に臨んでいる。スポーツをしない学生よりは、はるかに鍛えられている体でグラウンドを駆け抜け、顔つきにはまだ幼さが残っている。

体の大きさも社会人に比べてバラつきがある。中でもスクラムハーフは特に小柄で、前田先生もこんな風に小さかったのだろうかと思

像してしまつ。

先生と競技場に行つてから、まだほんの少し。

“先生”を考えると、あの日のすべてが鮮やかによみがえる。汗をかいて走つてきた先生。

先生のダウンジャケットのにおい。

つないだ手のぬくもり。

ハンバーガーを頬張つた横顔。

「送らせてください」と言つた真つ直ぐな目。

別れ際に向けられた笑顔。

「はるかさん」と呼んだ声。

今年はいつもより、イマイチ掃除が捗らない。

深夜2時に食卓に向かい合つて座り、和晃にジュースの入ったグラスを渡す。

「遅かつたね。しばらくは続くんでしょ？」

「んー・毎日宴会予約が入ってるからねー・」

帰宅があまりに遅い時は、夕食での飲酒はさせないようにしている。朝までアルコールが体に残ってはいけなからだ。

「今日ね、大掃除しながら高校ラグビー観てただけど、ほら、駅近くの男子校が全国でAシード校だつて知つてた？」

「あゝ、強いもんね。シードなんだ」

「えっ？知つてたの？」

「うん。」

「え、だつて和晃、スポーツニュースとか見ないよね??」

「ニュース見なくても、それくらい有名だから知ってるよ。ここのところ毎年全国大会まで行ってるもんね」

そういうスポーツに興味関心のない和晃ですら知っていたことを、自分は知らなかったなんて。

なんか悔しい。

「え？はるか、知らなかったの？」

「・・・最近知りました。」

「えええゝっ、有名なのにいゝ。あそこはサッカーも強いんだよな」

「へーそうなんだ・・・」

「今年は優勝できるといいねー」

「うん。シードだから、2回戦から出るみたい。テレビの前に座って応援するんだ」

「ははっ。また楽しみが1つ増えたね」

「うんっ」

長い時間、1人で過ごす私のためにと、CS放送の受信契約をしたのは和晃の方だった。

和晃に勧められて行ってみたクリニックで前田先生に出会い、和晃が与えてくれたCSでラグビーを観て、前田先生を想う。なんて皮肉な話だろう。

そのことに罪悪感すら感じていない私は、なんて、ひどい妻だろう。

大晦日は雪がちらついていた。

早朝から和晃と車に乗り、春日部家で降ろしてもらった。周囲を山に囲まれた場所にある和晃の実家は、寒さも都心とは比べものにならず、木造の古い家の中は、廊下に立つと吐く息も白くなるほど底冷えがする。

台所へ向かうと、お義母さんはすでに“おせち作り”を始めていた。始めるといつても、野菜を洗ったり、重箱を出しておくといった程度だが。

「おはようございます」

「あら、おはよう、はるちゃん。」

挨拶だけ交わし、エプロンを着けて調理を始める。

春日部家に1人で来た時は、なるべく無心になるようにしている。ひたすら作り、ひたすら動く。

結婚する前から出入りしている家だが、初めの頃は、“言われたこと”や“習慣の違い”に対して、驚いたり腹が立ったり、時には傷つくこともあった。結婚して“嫁”になった以上は、どんなことも受け入れ、耐えていかなければならない。いちいち感情を抱いていては、続けられないと思った。

そんな自分では、続けていく自信がなかった。ならば無心になろうと決めた。

それが、私が出した“嫁”を続けていく手段。

おせちも半分以上出来上がった頃、お義姉さん夫婦が帰ってきた。和晃には姉が1人いて、すでに嫁いでいる。子供が2人いて、お義父さん、お義母さんは孫2人にメロメロだ。玄関の方で賑やかな声がしたと思ったら、バタバタと廊下を走る音がして、姪の2人が台所の扉から顔を出した。

「あー、はるちゃんあん」

4才になった『さつき』ちゃんがニコニコしながら言った。

「さつきちゃん！あれー、また大きくなったねー」

「はるちゃん何してるの??」

6才になった『やよい』ちゃんがすぐに話しかけてくる。

「お正月のおせちを作ってるんだよ」

「ふーん。ねーはるちゃん遊ぼう」

さつきちゃんにエプロンを引っ張られて下を見る。

「うん、遊びたいけど、もうちょっと待っててくれる??」

「えー」

「さつき、だめよー。はるちゃんはまだ、ごはんを作ってるでしょ」
「やよいちゃんがさつきちゃんの腕を引っ張る。同時に私のエプロンも引っ張られていく。」

「やいはい揉めている2人の後ろに、お義姉さんが来た。」

「あらあ、はるちゃん、今年も作ってくれてるのね」

「あ、はい。ご無沙汰してます。」

「和晃は相変わらず忙しいの?」

「はい。毎日帰りが遅くて・・・」

「はるちゃんも大変ね」

「いえ、もう慣れましたけど・・・」

「そう?」

お義姉さんの笑い顔は、和晃とよく似ている。

「ほーらほらっ! はるちゃんの邪魔しないの! あっちに行くわよ」

お義姉さんは、子供2人を居間へ連れて行き、それと入れ替わるようにお義兄さんが入ってきた。

「おっ! はるちゃん、久しぶりっ」

「あ、こんにちは。お久しぶりです」

お義兄さんは、少し太めの35歳で、36歳のお義姉さんよりも1つ年下だ。気さくで話しやすく、春日部家での苦労を唯一理解し合える人だ。

「今年もはるちゃんのおせちが喰えるっていうから、楽しみにして来たよ」

「ええー、お義兄さん、また太っちゃうんじゃないですか?」

「ハハハハーツ、それは言わないでえ」

お義兄さんは笑いながら、自分も居間の方へ歩いて行った。

台所に立ち、1人黙々と作り続ける。

居間の方からは、わいわいと騒がしい声が聞こえてくる。

こんな時はいつも、孤独を噛みしめる。

どんなに嫁としてこの家に入っても、やっぱり所詮はよそから来た人間。

そばにいて欲しい時、夫はいつも不在。

煮物をかけていたコンロの火を止め、気分転換に裏口から外に出る。朝よりも、雪がたくさん降っている。近くに見える山は白く、すっかり姿を変えていた。

肩にゾクツと寒気が走る。

ふいに、先生のダウンジャケットを思い出す。

競技場の前で、私にダウンを羽織ってくれた先生。

暖かったなあ・・・

今年最後の日、先生はどう過ごしているのだろう。

クリニックは年中無休だから、今日もやっぱり仕事だろうか。

あー・・・早く家に帰りたい。

お世치를仕上げ、「泊まっていって」と引き止めるやよいちゃんとさつきちゃんを宥めて、春日部家を跡にした。

1時間に1本しか通らないバスに乗り、乗り換えの為に駅前へ向かう。駅前に着く頃には18時を回っていて、すっかり暗くなっていた。

駅前のバス停に降りると、なんだかやたらとホツとした。

クリニックに通う為に何度も降りたバス停。

先生と初めて『ブレイク』でコーヒーを飲んだ後、並んで歩いて来たバス停。

先生はいないけど、あの時先生が立っていた場所に立ってみる。ため息が出た。

疲れにも似た、安堵のため息が。

大晦日だからといって、和晃が早く帰宅することではなく、マンションの部屋で1人、テレビのカウントダウンを見ながら新年を迎えた。お正月だろうと、特別なことは何もない。

中継がある日は、1人でラグビーを観て過ごした。

地元の高校は決勝戦で破れ、今年も優勝を逃した。

先生は、ラグビーを観てるだろうか。

年が明けて、最初に電話をしてきたのは麻耶ちゃんだった。

『なんで何も聞いてへんの！？そんなデートしといて！』

「デート・・・だったのかなあ」

『誰が聞いたってデートやわそなん！えっ？携帯の番号もメアドも聞いてへんのやる？？』

「うん・・・」

『なにしとんのよ、はるちゃん』

「だって・・・聞いてもいいのかどうかわからなかったんだよ・・・。知リたかったり教えたかったりするなら、先生の方から言ってくれ
るかなって・・・思って」

『そやなあ・・・確かに、はるちゃんの立場やったら、聞くの躊躇う
のもわからんでもないわあ』

「コーヒーも試合も、誘ってくれたのは先生の方からだっし・・・」
『試合に行くって決まった時点で、待ち合わせに変更とかあるかも
しれやんのに、携帯番号くらい教えたりせえへんの？普通』

「治療終わった直後にほんの少し小声で話すくらいしか出来ないし、
携帯番号ってなんか、親密さが出ちゃうっていうか、勇気いるし・・・」

「

『そうやんなあ・・・。歯医者の中やと、他の助手とかもあるやろう
しな。大きい声で個人的な話は出来へんよなあ』

「んー・・・先生も、人目を気にしてるっぽかったし・・・」

『なあ、先生って独身なん？？』

「わかんない。でも多分・・・」

『先生は、はるちゃんが人妻やってわかってて誘ったんかなあ
？』

「どうだろう・・・。私、指輪は常にしてないけど、保険とかでそう
いうのってわかつちゃうんじゃないの？」

『あ、はるちゃん指輪してへんの？』

「うん。好きじゃないから」

『そうなんや。んー・先生はどういうつもりやってんやろ・』

「ただ単に・ラグビー見せたかっただけとか・」

『それにしちゃうわけぶりなんちゃう??』

「ー・そうだねえ・ハア、先生に会いたいなあ」

『会いに行ったらええやん』

「でも、春に会おうねって言われたし」

『春まで待つ??』

「うん・もうどこも悪くないし。理由もなくクリニックには行けないもん」

『歯石取りとかあるやん。そんなんは??』

「それは先生の仕事じゃないよ。衛生士とか助手の人たちがやってる」

『でも行ったら顔は見えるやん!』

「ハハッ、そうだけど」

『気持ち・伝えへんの?』

「ー・そんなことできないよ」

『そうかあ・旦那のこともあるしなあ。』

「うん・。和晃はキズつけないって決めてるから」

「んー・あ、ほんだら、好きって気持ちは伝えへんでも、友達になつて下さいって言うのはええんちゃう??」

「あはっ・友達・」

思わず苦笑いしてしまう。

友達という表現で仲良くしてもらうには、あまりにも先生は“大人

”で、違和感を感じた。

『だって、何かしら繋がりとかが関係がないと、今みたいに会いたくても会われへんやん』

「そうだね・。会う理由がない」

『そやろ?次行った時にさあ、手紙とか渡してみたらええやん』

「手紙・」

『うん。他人に見られへんようにこつそり渡すねん。受け取ってくれると思うわ』

「……うん……」

『な？』

「うん……考えてみる。」

『おおっ！その調子やわ。おもしろなってきたわあ』

「……楽しんでるね麻耶ちゃん……」

『そらそうやわ。聞いたってこんなわくわくする話ないわ』

「他人ごとだと思って……」

麻耶ちゃんの電話の後は結局、手紙のことばかり考えるようになった。

渡そうか、渡していいものか迷っているようで、渡すならどんな内容にしようかと考えている。

結局、渡す気になっている。

先生は受け取ってくれるのだろうか。

手紙をもらったらどう思うだろう。

迷惑になったりしないだろうか。

渡すタイミングはあるだろうか。

気持ちをどう表現すればいいだろう。

繋がりをもちたいです。これからも仲良くしてもらえませんか？……？

毎日毎日、前田先生を想いながら、変わらぬ日常を過ごしていく。先生に会いたい気持ちを抑えながら、時々、タンスの奥にしまっている先生のプロフィール写真を見ながら。

2月。

冬の寒さはピークを迎え、バレンタインデーは年末以上に雪が降った。

「ちよっ・誰！？今年は暖冬傾向とか言ってた人！」

毎朝見ている天気予報の気象予報士に向かって、テレビの前で突っ込んだ。

「はるかには家にいることが多いんだからいいじゃない」

出勤前、じつくりとマフラーを選びながら和晃が言う。

「だけど、スーパーには自転車で行くんだからっ。寒い！」

「だってはるか、車はいらないって言うから」

「ー・・・いらないけど」

自分専用の車なんか持っていたら、春日部家からの嫁出動要請は確実に増えるに決まっている。和晃が、私専用に軽自動車を買ってくれると言ってくれたことが何度もあるが、「私の為に新たなローンを組ませるのは悪い」「自転車で充分だから」と、断り続けている。自分のわがままで意地を張っているとはいえ、雨や雪の日はやっぱ辛い。

「和晃、今日チョコレートもらえるかなあ」

「さあ、どうだろうね・・・」と言いつつ、見る限り、顔は期待に満ちている。

「私、楽しみにしてるから」

「ハハハ、いつてきまーす」

去年、和晃が職場の女性からもらってきたチョコレートの中に、1つだけ、「本命では??」と思わせるようなものがあつた。鈍感な和晃はそんなことには気づいてもいないようだったが、女だからなのか、私にはなんとなくわかった。普通なら、嫉妬したり、不安になったりするのかもしれないが、その時は、夫が職場でモテているということが妙に嬉しかった。結婚していても、他の女性から見ても、素敵だと思われる男性であってほしい。

バレンタイン・・・クリニックには若くて綺麗な女性がたくさんい

た。

前田先生も、彼女たちからもらうのだろうか。

好きなのに、チョコレートを渡す権利もなければ、そんな瞬間を与えられることもない自分に虚しさを覚える。

会うことすら、ままならない自分に。

2月というのは、1年の中で最も早く過ぎていく月のように感じるのは、私だけなのだろうか。師走と書く12月よりも、2月の方が早い気がする。

日数が少ないから？

寒さが緩んだ2月下旬、伸びてスタイリングしにくくなった髪を切りに、美容室のあるショッピングモールへ行くことにした。

美容室の扉を開けると、お客さんの髪をブローしている牛嶋さんが、私に気づいて「いらっしやいませー」と言った。

バッグとコートを預けて待っていると、先客の会計を済ませた牛嶋さんが近づいてきた。

「お待たせしました。今日はどうします？」

「この前みたいに切ってもらえます？」

「ショートボブですか？」

「うん。あの時の、結構気に入ってて」

「でしょっ？春日部さん、短いのが似合ってますよ」

「うん・・そうかも」

「そうっすよ。しかも、長い時に比べて頻繁に来て下さるんで、こっちも助かってます」

「あはは、そっちか」

「うそうそ、冗談っすよ」

「いや、今のがホンネだねー」

牛嶋さんは、後ろから両手でサイドの髪の長さを揃えて見る。

「前下がりの感じで・・いいっすか？」

「うん。お願いします。」

もう少し。

あと1ヶ月くらいしたら、前田先生に会える。

誕生日の日。「髪切りました？」と先生が気づいてくれた時と、同じスタイルにしたかった。

見ただけで、私だと気づいてもらえるように。

「春日部さん、なんか明るいつすね」

仕上げのスタイリング剤を髪になじませながら、鏡越しに牛嶋さんが言った。

「明るい？」

「んー…なんちゅうか、なんだろうな。」

「え？」

「なんとなくつすけど。明るいなーって思ってた」

牛嶋さんが笑顔を向ける。

思わず笑ってしまう。

美容室を出て、モール内にある大きな文具店に入った。

天井から下げられている案内表示を見て、『便箋・封筒』と書いてある通路に向かう。

離れた所から見ても、そこだけ淡いピンクの品物が置かれている場所があった。季節限定で、春のイメージや桜の柄をあしらった万年筆やノートが並び、その中に、全体に桜の花びらを散らした模様の横書きの便箋を見つけた。同じ模様で、手のひらサイズの『名刺・カード入れ』と書かれた封筒も一緒に手に取った。

レジに持って行き、会計を済ませる間、それを買っていることにドキドキした。

これで、先生に手紙を書こう。

先生が「春に会おうね」と言ったから、便箋のデザインにも「春」を選んだ。

折れ曲がらないように、大切にそっと、バッグへしまう。

春が来るまでもう少し。

先生に会えるまで

あと少し。

先生がくれたもの。

3月に入ると、小春日和の暖かい日が続いて、気象予報では「今年は例年より早い桜の開花が期待できそうです」と言っていた。待ちに待った春がすぐそこまで来ていると思うと、それだけで胸が高鳴る。

毎朝ベランダに出ては、マンションの向かいの保育園の正門に立つ、3本の大きな桜の木を眺め、今か今かと開花を待った。

桜が咲けば、春。

リビングのテーブルに、花びら模様の便箋を置き、少しずつペンを走らせていく。

麻耶ちゃんとの電話の後、四六時中考えていた先生への手紙。

前田先生

突然のお手紙すみません。

12月に先生と一緒したラグビーの試合、本当に楽しかったです。

これからも、先生といろんなお話が出来たらいいなと思っています。

気が向いたら、ご連絡いただけませんか？

春日部はるか

手紙の最後に、携帯番号とメールアドレスを書いた。

まだ、いつクリニックに行けるのかも決まっていけないのに、手紙を書いておくなんて気が早いような気もした。

でも、書いてみたかった。

書いた手紙を読み返すと、恥ずかしさで顔が熱くなった。

先生は、これを読んだらどう思うだろう。

先生は、電話してきてくれるだろうか。

先生は、メールを送ってくれるだろうか。

何度も読み返した手紙を折りたたんで、小さな封筒に入れる。

封筒を見ると、先生に渡す瞬間を想像してしまう。

先生は、どんな顔をするだろう。

3月13日。

和晃は32歳の誕生日を迎えた。

付き合っていた頃は、お互いの誕生日には必ず休みを合わせて、二人だけで祝うのが当たり前だった。今は全くそんなことはなく、今日も和晃は仕事に出掛けて行った。

それでもせっかくの誕生日。夕食はいつもより豪勢に作ってあげようと、スーパーで少し高いお肉を買った。スーパーの隣にある洋菓子店で、15cmの小さなデコレーションケーキを買い、プレートには『32歳おめでとう』と入れてもらった。洋菓子店は、明日に迫ったホワイトデーを前に、2〜3人の男性客の姿があった。

そういえば、和晃はバレンタインデーのお返しは買ったのだろうか？いつもなら、自転車で5分の所を、買い物袋とケーキの箱を持って歩いた。

誕生日を意識してか、和晃はいつもより早い帰宅だった。

「今日は誕生日だから、ステーキにしたよ」

和晃のピアグラスにビールを注ぐ。

「わー！ステーキなんて、久しぶりだ」

和晃は嬉しそうに言う。

ケーキに口ウソクを立てて火をつける。

「それじゃあ、32歳！おめでとーう！！」

乾杯をして、和晃が口ウソクの火を吹き消した。

「ありがとう。」

「うん。ケーキは食後にする？」

「うん、そうする」

ケーキを一旦冷蔵庫にしまう。

「ねえ、明日ホワイトデーだけど、バレンタインデーのお返し、ちゃんと買った？？」

先月のバレンタインデー、和晃はチョココレートを4つ持って帰ってきた。今年のチョココレートの中には、去年のような本命らしきものはなかった。なんとなく、つまらない気がした。

「買ってない。行く暇がなくて」

悪びれた様子もなくあっさりと言う。

「ええっ、どうするのっ？」

「ん？どうしよう」

「もう・・・言ってくれば買っっておいたのに」

「んー・・・いいや、店で何か作るよ。」

「何かって・・・デザートとか？」

「うん。チョココレートくれた人に、食べたいもの聞いて、明日作ってやることにします」

「お店の料理が食べられるのは嬉しいだろうけど・・・でも、なんかちょっと、手抜きな感じがするね」

「かんじじゃなくて、手抜き。だってどうせ義理チョコなんだし。いいんじゃない」

「どうせって・・・本命が欲しかったの？」

からかい混じりに聞いてみる。

「いや、違うけど。なんか面倒くさくて。毎年毎年・・・」

「出た出た。これがいい人ぶってる料理長の正体だわ」

「ははは、バレたか」

「こんな32の既婚者に、まだチョコレートくれる人がいるんだから、有難いと思わなきゃ」

「はーい。って、はるか、いつも自分が食べたいだけじゃん」

「ははは、バレたかー」

3月も残りあと5日となった頃、保育園の桜の一部が咲いているのが見えた。

咲いた。

桜が咲いた。

春が来た。

先生に会える、春が来た。

その日の夕方、郵便受けに、クリニックからのハガキが届いていた。
『定期検診のご案内 ご都合の良い日時をご連絡の上、ご来院下さい。』

嬉しくて、ハガキを持つ手が震えていた。

もう、理由はいらない。

無条件にクリニックへ行ける。

無条件に先生に会える。

先生への招待状・・・

ハガキをリビングのコルクボードに貼った。ボードの前を通るたび

に横目でハガキを見て、リビングに座っているときはじつと見た。もういつでも、クリニクへ行っている。

予約はいつにしようかとカレンダーを見てみると、携帯電話の着信音が鳴った。

高校の時の友人・友里だ。

「もしもし？」

「もしもし、はるちゃん？」

「うん。久しぶり」

「うん・元気だった？はるちゃん」

「元気だよー。友里は？そういえば、今月で仕事終わるんだっけ？」

「あ、うん。でもね、新しい就職先、もう見つけたの」

「え！？そうなの？よかったじゃない！」

「うん・母親の知り合いの小さな会社の事務なんだけどね」

「そう！よかったねっ」

「ん・っていうかね、違うの。電話したのはそのことじゃなくてね」

「え？うん、どうしたの？」

「前に話した、年下の彼とね・別れちゃった・」

「えっ・・・・？うつうそ、なんで？」

「同じ年の女の子と・浮気してた」

「・・・」

「浮気・・・？」

「うん・しかも、女の子が妊娠しちゃって、そのコと結婚するって・・・」

「・・・」

「私・・・私・辛くて・・・ヒロ君はまだ若いから、結婚したいって思っても我慢してたのに・妊娠したからってあっさり結婚決めるんなら、私も妊娠すればよかった・・・！」

受話器の向こうで、友里がむせび泣いている。

「友里・・・」

『うつーっうあーあっ・・・』

「・・・友里・・・」

私には友里を慰める資格はない。

友里の彼がやったことと、私の前田先生への想いは、きっとそんなに変わらない。

私はただ、和晃に知られていないだけで。

受話器を持って、友里の嗚咽を聞いていた。

優しい言葉ひとつ、出てこなかった。

友里の彼が、友里に言わずに他の女性と付き合っていたことを、責める気になれなかった。

それでも、前田先生を好きだと思う。

それでも、前田先生に会いたいと思う。

悪いことだとわかっていても。

理解されなくても。

エイプリルフル。

桜はまだ三分咲き。けれど、最初に咲いた花からは、ひらひらと花びらが落ちている。

ベランダから見ると、保育園の正門の周りの足元は、うつすらと淡いピンクに染まっている。

先生に会いに行こう。

クリニックの予約は4月の10日に取れた。相変わらず患者は多いようで、時間も夕方の17時しか空きがなかった。

前日の夜は眠れなかった。

12月のラグビーの試合の日以来、4ヶ月ぶりに会える先生。

ベッドの中で、「また、春に会おうね。はるかさん」と言った先生が、何度も脳裏に甦る。

朝起きて、和晁を送り出した後は、夕方が待ち遠しくてたまらない。早く会いたい気持ちと同時に、久しぶりで緊張が解れない。

胸はドキドキ高鳴るばかり。

昼食の後は、ドレツサーの前でいつもより丁寧にメイクをした。

去年の秋に買った、白いボウタイブラウスを着る。胸元で大きくリボンを締めて、空色のカーディガンを合わせた。

春物のバッグを出す。タンスの奥から先生に宛てた手紙の封筒と、プロフィール写真の載った紙を出して、先生の顔を確かめた。

冬の間、何度も繰り返し見てきた先生の写真。

封筒だけをそっとバッグにしまい込み、ドキドキしながらチャックを閉めた。

家を出て、バス停に向かって歩いていく。

クリニックに通っていた頃は当たり前だったこと、一つ一つに喜びを感じる。

この喜びを、ずっと待っていた。

冬の間、ずっと。

クリニックの入り口の前で、深く息を吸った。

待ちに待った瞬間。

胸の高鳴りを抑えながら扉を開けた。

つんと鼻を突くクリニックのにおい。

先生のダウンジャケットと同じにおい。

待合室には、3〜4人の患者が座っている。

自分も、受付を済ませてソファに座った。

診療室のガラス扉の向こうを、医師と助手が行き交う。待っている間、前田先生は見かけなかった。

助手の下山さんが出てきて、私の名前を呼んだ。

「春日部さまー・・・」

診療室に入り、4番ブースへ案内された。

「本日は定期検診でよろしかったですよね？」

下山さんが診療の準備をしながら尋ねた。

「あ、ハイ」

「はい。では少々お待ち下さいね。」

診療台のシートに座り、胸がトクトク鳴るのを聞きながら待った。

トクトク

トクトク

トクトク

数分経って、カルテを持った若い女性の医師がブースに入ってきた。

「春日部さん、こんにちは」

愛想良く笑うその若い女性は、髪を後ろで束ね、ピンクのマスクをしている。

「・・・こんにちは」

「本日から春日部さんの担当をします、坂井です。」

「・・・」

坂井先生？

先生の顔を見て、一瞬止まってしまった。

「よろしく願いますねっ」

「・・・あ、よろしく願います・・・」

前田先生は？

「えーと、今日は定期検診でいらっしやっただんですねー．．」
カルテを見ながら、坂井先生が話している。

先生を見ながら頷いているが、何ひとつ、耳に入っていない。
胸が、トクトク鳴っている。

「．．．ですので、今日はまず、お口の中をチェックさせていただいて．．．」

「あの」

坂井先生は、カルテから私に目を向けた。

「はい？」

「．．前田．．先生は．．」

坂井先生は、困ったような笑みを浮かべて言った。

「あー．．3月でお辞めになったんですよ」

「前田が良かったですよね・・・すみません」
坂井先生は苦笑いしながら頭を下げた。

先生が・・・辞めた・・・？

「あの・・・それで、先生は・・・」
声が、うまく出ない

「さあ・・・実家に戻られたみたいですけど」

「実家・・・どこですか・・・？」

「神戸なんですけどね」

検診を受けていても、何をされているのかわからなかった。
坂井先生が、何かいろいろ言っていたけど、何も聞こえてこなかった。

検診が終わり、シートを起こされる。

「特に、目立った異常は見当たりませんね。よく磨けています。」
坂井先生が、カルテに書き込みながら言う。

「・・・前田先生に、伝えていたきたいことがあるんですが・・・」

坂井先生が私を見る。

「・・・あ、ハイ、何でしょうか」

「私の・・・連絡先を・・・前田先生に伝えてもらえませんか・・・」

「え、あのう・・・」

「・・・お願いしますっ・・・」

「・・・」

「今・・・どうされてるのか知りたいんです・・・」

坂井先生は困った顔をしている。

でも、このまま帰れば、本当にもう、何もなくなる。

「わかりました。でも、必ずお伝えできるという保証はありませんが、よろしいですか？」

先生は、優しく言った。

ただ、黙って頷いた。

坂井先生に渡されたメモ用紙に、携帯番号とアドレスを書いた。診療室を出て、待合室のソファアに座る。

体に力が入らない。

頭がぼんやりする。

胸の鼓動はいつしか静まり、浅くしか吸えない息が苦しくなった。

受付カウンターの女性2人が、こっちを見ながらヒソヒソ話し、クスクス笑っている。

辞めた先生に連絡先を伝えて欲しいなどと言った患者は、前代未聞だろう。

でも他に、方法がない。

笑いたければ笑えばいい。

クリニックが、知らない場所のように感じる。

前田先生がいないクリニック。

ここはどこなのだろう。

会計を済ませて、出口へ向かう。

診療室の方を振り返ってみる。

どこを見ても、前田先生はいない。

クリニックを出て、階下へ下りるエレベーターへ向かって歩く。
頭が働かない。

私は何をしているんだろう。

先生はどこ？

「春日部さん？」

後ろから、バタバタと足音がして、名前を呼ばれてハツとする。
私の前に、白衣を着て眼鏡をかけた、加護先生が立っている。
先生の顔をぼんやり見る。

「……………」

「春日部さん……ですか？」

「……………はい」

なに？

「前田が担当していた患者さんですよね？」

「……………」

上目遣いで頷く。

「ああ……よかった！危うく逃してしまつところでした」

「……………」

加護先生は、白衣のポケットから小さな白い紙袋を出した。

「前田から、預かっていたものです」

そう言うと、私に紙袋を差し出した。

「春日部はるかさんという女性が来院されたら、渡して欲しいと言われて」

前田先生が・・・？

紙袋をそつと受け取る。

「では」

加護先生は、私の横を通り過ぎる。

「あのっ・・・」

「？はい？」

加護先生が振り返る。

「前田先生は・・・今・・・？」

先生は、首を傾げて言う。

「さあ・・・。辞めてから、さっぱり連絡がつかないので、どうしてるのかはちよつと・・・」

「・・・」

「実家が神戸なんですけど、むこうに帰ったことは間違いないと思いますけどね。」

「・・・そうですか」

「じゃあ、お気をつけて。」

会釈をして、加護先生はクリニックへ戻って行った。

エレベーターホールに1人立ち、受け取った紙袋を開けてみる。

左の手のひらに出てきたのは、小さなプラスチックのラグビーボールが付いたストラップだった。

もう 限界だった。

とめどなく、涙があふれ出す。

次から次へと、あふれ出す。

握りしめたストラップが、涙でぬれる。

体の力が抜けていく。

その場にへたり込み、長い間 泣いていた。

バッグの中の、先生への手紙が虚しい。

先生

先生

前田先生

先生が言った

「会える春」はいつですか？

ストラップには

どんな意味があるのですか？

先生への想い、その報い。

外は雨が降っていた。

クリニツクの日はやっぱり雨だ。

傘は持っていない。

雨の中を歩いていた。

視界に入るものは色あせて、何もかもがぼやけて滲む。

雨のせいなのか

涙のせいなのか

春の雨はまだ冷たい。

家に帰り着いても、玄関に座り込んだまま、ぼんやりと右の手のひらにあるラグビーボールを眺めていた。

先生がいなくなった。

春に会おうねと言ったはずの先生。

4ヶ月、先生に会えることだけを信じて

ただ、その日を待ちわびて

毎日 毎日 先生を想って

携帯電話のメール着信音が聞こえ、半ば面倒くさい気がしながらディスプレイを見た。

メールは麻耶ちゃんからだった。

『はるちゃ〜ん。先生には無事会えた〜？今頃幸せをかみしめとるんやろうなあ。報告待ってるよ〜』

ため息と、涙が入り混じる。

涙はどうして、尽きることがないのだろう。

雨に濡れて冷えきった体の中で、目の周りだけが熱い。

麻耶ちゃん　先生はもう・・・　いなかったよ。

シャワーで体を温めてから、キッチンへ立った。

泣きすぎたせいか、頭がズキズキ痛む。

それでも夕食を作らなければいけない。

悲しい出来事があったなどと、和晃に知られてはいけない。

和晃には関係のないこと。

普段通り、振舞うしかない。

何度も、料理を作る手が止まる。

いつもより、出来上がるのも遅かった。

食卓に、1人分の料理を並べて座る。

食欲など、ちつとも湧いてこない。

先生がいなくなった。

前田先生がいない。

いると思っていた場所に、いなかった。

涙が出るのに、実感が湧かない。

「どうしたの？」

帰宅した和晃が、私の顔を見るなり言った。

「え？」

「顔。すごく赤いよ。」

「あ・・・えと、今日ね、歯医者の帰り、すごく雨が降ってて、傘持
つてなかったから濡れちゃって・・・」

「熱っぽいの？」

「あ・・・ちよつと、頭が痛いかな」

「どれ？」

和晃が私の額に手をあてる。

「風邪引いたかな？んーちよつと熱い気もする」

「・・・そうかな」

「うん。無理しないで、俺のことはいいから。横になって」

「・・・」

「はるか？」

「あ、うん・・・ありがとう。」

「暖かくして寝るんだよ」

「うん」

「おやすみ」

「おやすみ・・・」

和晃は、冷蔵庫から缶ビールを出して、1人で食卓に座る。
そのうしろ姿を見てから、寝室に入った。

和晃の優しさが痛い。

和晃以外の人を想い、いなくなったことでボロボロになっている私に、何も知らずにあたたく接してくれる和晃。ベッドに入っても、すぐには眠れなかった。

今日だけで、どのくらいの涙が出ただろう。

日常というものは、無情なほど当たり前のように繰り返される。

前田先生がいなくなった現実を受け入れきれないまま、またいつもの生活を続けていく。

先生に会えなかったことで、先生に会えることを楽しみにしていた4ヶ月が、延長されているような気がしてならなかった。

先生に会えていれば、何かが変わっていたはずの“今”

結局、何も変わらなかった“今”

何をしているときでも、携帯が常に気になる。

もしかしたら、先生が連絡をくれるかもしれないと期待をして、どこかで自分を誤魔化している。

クリニックが、私の連絡先を伝えてくれているのかも定かではない。伝わっていないのかもしれない。

そして本当は気づいている。

先生からの連絡など、あるはずがないことも。

先生とはもう、会う術がないことも。

スーパーの帰り道、自転車を押して歩きながら、保育園の正門にある、桜の木の下に立った。
ボタボタと咲く満開の桜が、花びらを風にのせて、精一杯、「春」を演出している。

この桜が咲くのを、ずっと待っていたのに。
今ではもう、何の意味もない。

麻耶ちゃんに事実を話したのは、クリニックに言ってから2週間もしてからだった。

『おっ・・・おらへんかったん？』

「・・・うん」

『えっ・・・ちよっ・・・なんでなん！？』

「・・・辞めて・・・神戸に帰ったって、他の先生たちは言ってたけど」
『連絡先とかわからへんの？』

「個人情報だから、教えてもらえないよ・・・でも、辞めてから連絡がつかないんだって」

『ええっ・・・ウチ・・・ちよつと待って、わけわからんわ・・・。なんで・・・春に会おう言うたの先生の方からやんか・・・なのに・・・』

麻耶ちゃんも、予想外の展開に動揺していた。

「もう・・・多分、会えない」

『そんな、ちよつと待ってえな、なんとか見つけ出す方法とかあるんちゃう？歯科医やったら、開業とかするつもりかもしれへんし、ホームページ立ち上げたりとかするかもわからへんし・・・』

「うん・・・」

『・・・はるちゃん・・・大丈夫・・・？』

「・・・うん・・・」

『・・・神戸かあ・・・。はるちゃんとかからだ新幹線で2時間半くらいか・・・。ちよつと遠いなあ・・・』

「・・・・・・・・」

『神戸の・・・人やったんやなあ』

「・・・ストラップをね・・・」

『え？』

「ストラップを・・・もらったの・・・最後に」

『・・・・・・・・』

「ラグビーボールが付いててね、加護先生っていう男の先生に、前田先生が私に渡すように預けてたんだって」

左手で携帯を持ち、右手の人差し指で、テーブルの上のストラップを軽く弾いた。

「・・・どういう意味があるのかなあ・・・」

『はるちゃん・・・』

「・・・・・・・・」

『はるちゃん、先生探そう』

「え？」

『探す言うても、ネットで名前検索するくらいしか出来へんけど、いつかホームページ出来るかもしれへんやん』

「・・・ふふっ、それじゃストーリーだよ」

『えっ・・・あ、まあそうかもしれないけど、でもはるちゃん、先生に会いたいねやろ？』

「・・・・・・・・うん」

『純粹に会いたいただけやねんから、とにかく探してみよう』

「・・・・・・・・」

『先生とデートしたことあんねやしさあ、もし見つけて会いに行っても、先生、嫌な顔はせえへんと思うわ』

「神戸まで会いに行ったりしたら、怖がられるよ。引くんじゃない？」

『そなんん！見つけてから考えたらええわ！！』

「う・・・うん・・・」

麻耶ちゃんの気持ちは嬉しかった。

でも、先生は見つからないと思う。

ストラップ以外に、連絡先も何もなかったということは、先生には、私と何かを始めるつもりなど、なかったということだと思うから。クリニックも、先生とは連絡がつかなかったのだろう。

何日経つても、先生から連絡が来ることはなかった。

麻耶ちゃんが言った通り、時々インターネットで先生の名前を検索してみても、前田先生らしき人物にはヒットしなかった。

「人」1人を、そんなに簡単に見つけ出せるものではないに決まっている。

4月の終わりになると、前田先生と出会う前のような、単調な毎日が戻ってきていた。

桜の木も、青い若葉を生い茂らせ、日差しにも少しだけ暑さを感じ始める。

ラグビーはシーズンオフで、中継も全くない。

ただ毎日、和晃の妻としての日常を過ごしていく。

朝、和晃の朝食を作り、和晃を送り出した後は、洗濯物を干す。部屋の掃除をして、スーパーへ食材の買出しに出掛け、昼間は少しのんびりして、夜は夕食を作り、和晃の帰りを深夜まで待つ。

時々先生を思い出し、今、どうしているだろうと考える。

先生の写真を見たり、ストラップを眺めてみたり。

けれど、状況は何も変わらない。

先生を想う気持ちも、先生に会いたいという気持ちも。

ゴールデンウィークを目前に控え、和晃の店には予約が殺到し、準備や仕込み、発注、書類の整理や売り上げの算出、会議・・・和晃の帰宅は毎日2時を回るようになっていた。

その日も遅く帰宅した和晃は、私がお風呂を済ませてリビングへ行く、テレビの前で携帯を片手にうたた寝していた。寝室へ行き、ベッドに入ればいいものを、和晃はリビングでよくうたた寝をする。開きっぱなしの携帯を取った弾みで、何かのボタンを押してしまった。ディスプレイを見ると、メール作成の画面だった。誰かにメールを送ろうとして、眠ってしまったようだ。

『おやすみ』

おやすみ・・・？

しかもよく見ると、携帯メールではなく、プロバイダーのメールサーバーの画面だ。

いつから、メールアドレスを持っていたのだろう。そんな話は聞いたことがない。

心臓が、ドキドキ鳴り始める。

このメールは、誰に送るのだろう。

ドキドキドキ　手が震えるのを感じながら、前画面へと戻していく。

From: 温美

『おはよう、たあさん（^^）今日は学校でレポートの発表です。応援しててね。頑張るよ　』

from: 温美

『今日はお仕事お休みなんだー。連勤ばかりで大変だね。体大事

にしなきゃダメだよ。

『愛してる』

ドクドクドクドク

f r o m : 温美

『私も大好きだよ、たあさん』

f r o m : 温美

『たあさんに会いたい。そばにいてほしい。会いたいよー』

ドツドツドツドツドツ

心臓が、割れそうな音を立てる

f r o m : 温美

『ハッピーバレンタイン たあさん愛してるー（^^）』

f r o m : 温美

『今井さんはいい人だねー。素敵な上司に恵まれてるたあさんが羨ましい』

私が知らない会社での出来事や、和晃の身の回りのこと、「温美」は何でも知っていた。

メールは1年以上前のものまで続いていて、途中から何と書かれていたのか覚えられなくなった。

携帯を持つ手がひどく冷たい。

震えが止まらない。

横で眠っている和晃の顔を見る。

何がなんだかわからない。

温美って・・・誰？

たあさん？

愛してるって・・・なに？

和晃の肩を揺さぶる。

「ねえ、和晃」

「んー・・・」

和晃は顔にしわを寄せながら動く。

「ねえ、和晃っ」

目をゆつくりと開いたり閉じたりしながら、ぼんやりとした表情でこっちを見ている。

携帯のディスプレイを和晃の方へ向けた。

「ねえ、温美って誰？」

和晃を真っ直ぐ見て聞いた。

ドクドクドクドク

どうか、間違いであってほしい

「温美・・・？」

和晃は、よく状況を理解できていない様子で、携帯を覗き込む。

「これ、プロバイダーのメールサービスの方でしょうか？ログインしないと思えないやつ」

「・・・」

和晃は携帯をじっと見ている。

ドクドクドクドク

「和晃・・・誰とメールしてるの？」

和晃はようやく何のことかわかったらしく、携帯を手に取り、画面を待ち受けに戻した。

「ねえ、温美って誰？」

「あー・・・これは・・・ネットで知り合った友達っていうか・・・」
無表情で和晃は言う。

「友達・・・？」

「うん、料理のブログで知り合って・・・」

「和晃、いつアドレスなんて取得してたの？私、知らない」

ドクドクドクドク

「知り合ったときに、アドレスの取り方教えてもらって、こっちでもメール出来るからって・・・」

和晃は、私を見ない。

「・・・愛してるって何・・・？」

「愛してる？」

「メールで、その人に愛してるって言ってるでしょう？」

「あ・・・いや、ただの遊びで言ってるだけっていうか・・・」

「は・・・？」

意味が わからない

「いやその・・・」

「和晃・・・その人が好きなの・・・？」

何を言っているのだろう

「いや、仮想っていうか、架空で好きだけで・・・」

「はっ・・・？もう・・・意味わかんない・・・」

わからない

わけがわからない

「でもっ、本当に好きなのは、はるかだけっ・・・」

和晃が、慌てたように私に寄ってくる。

思わず床に手を突いて離れた。

「何・・・言ってるの・・・？」

「これはっ・・・」

和晃は、頭から額、顔全体に大量の汗をかき、あごからスタスタと水滴が落ちている。

人が追い詰められて、こんなに汗をかく姿を、生まれて初めて見た。その汗に、とてつもない嫌悪を感じていた。

「すごい・・・汗かいてるよ・・・なんなの」

「・・・う、うん」

「なに・・・？浮気してるの・・・？」

「ううん、違う！ただ、メールのやり取りしてるだけで、会ったこともないし・・・」

「だって！愛してるとか、大好きだよとか言ってるじゃない！会ったこともないのに言えるの・・・？」

「だから、それは架空の恋愛だから・・・」

「架空・・・？相手は実在する人間でしょう？私の知らないようなことも、その人は何でも知ってるじゃない。会社での・・・話とか・・・」

「相談・・・？私には、何にも話してくれないくせに、その人には何でも話してるんだ」

「はるかに言ったら、はるかもストレスを抱えると思ったし、やきもちも・・・妬くと思って・・・」

和晃は正座をして、両手を膝につき、俯いている。

「いつから・・・？」

「・・・半年・・・くらいかな・・・」

「嘘言わないでよ！31の誕生日の時、おめでとうってメール来るじゃない！1年以上前からでしょう！？」

「・・・もう、そんなになるかな・・・」

和晃は俯いたままだ。

気がつくど、私はひどく泣いていた。

息が切れる。

「ずっと・・・私に黙って・・・隠れて・・・裏切りだとは思わなかったの・・・？」

「・・・よく考えたら、裏切りだったと思う。・・・ごめんなさい・・・」

「私が・・・和晃の知らないところで、和晃の知らない人に愛してるって言っても、なんとも思わないの・・・？」

「思う・・・。ごめん・・・。ごめんなさい・・・はるか・・・」

「見つからなければ、ずっと続ける気だったんでしょう？・・・いずれは会って、関係も持つつもりだったの・・・？」

和晃は首を横に振る。

「俺、そんなに器用じゃないもん・・・。仮想恋愛だし・・・いつかは終わると思っただし・・・」

「ハハッ・・・器用に隠れてメールで恋愛してたんじゃない」
「・・・」

「・・・・・・」

私に、和晃を責める資格なんかない。

私だって、前田先生に恋していた。

和晃に知られなかっただけ。

でも、和晃は、私が前田先生を好きになるずっと前から、裏切っていた・・

前田先生を好きになったとき、和晃を裏切っている自分を責めた。なのに和晃は、なんの躊躇いもなく・・

裏切っているのは、和晃の方だった

「1年以上も・・何にも知らないで尽くしてたんだ・・」

「ごめん・・ごめんなさいはるか・・ごめん・・」

「あはは・・あははははは・・バカみたいね私・・」

乾いた笑いが出た。

「はるか・・」

ガタツ・・

私に触れようとする和晃から、逃げるように離れた。

「・・・・知らない人に見えるよ・・和晃・・」

「・・・・・・」

私の知っている和晃じゃない

「どうしたらいいかわからないよ・・」

「・・・・ごめん・・ごめんはるか・・」

「もう・・6年だもんね・・私に飽きたんでしょう?」

和晃は首を振る

「私に不満があるんでしょう・・・？だから・・・」

「ない・・・不満なんかないよ・・・！」

「ウソ・・・この1年、上辺だけで私に接してたんでしょう・・・？ホンはその人に打ち明けて、私は家にいて身の回りの世話だけして・・・、専業主婦だからってバカにしてたんでしょう・・・！」

「してないよ・・・！ちがう・・・」

「・・・なにが違うの・・・？」

心臓は、もう鳴り止んでいた。

頭がクラクラ、ぼんやりする。

信じていたものに裏切られる瞬間とは、こういうものなのか。
どこか信じられない部分と、救いようのない絶望感がそこにある。

「もう・・・やめるよ・・・。メールもしないし、アドレスも破棄する」

「当たり前だよ・・・！」

和晃を、初めて憎しみの目で睨んだ。

私を1年以上も騙していた。

私は知らずに尽くしていた。

和晃のために

和晃のために

愛されていると、信じていたから。

私に、和晃を責める資格はない。

きつとこれは報いだ。

前田先生を好きになった報い。

和晃をリビングに残して、寝室に入った。

何時間も泣いた。

声を出して泣いた。

怒りをぶつけるものがないのが辛かった。

自分の中で込み上げてくる怒りを押し殺し、それでも、怒りは何度も甦る。

窓から、まだ暗い外を眺める。

うつすらと、遠くへ延びる新幹線の高架が見えた。

先生

前田先生はどうしてるだろう

まだ、日が昇らないうちに寝室を出ると、ひんやりとしたリビングの床に、和晃はうずくまるように横になっていた。

毛布をそっとかけて、和晃の寝顔を見た。

そして静かに家を出た。

タクシーを拾い、駅へ向かう。

神戸へ行こうと思った。

先生には会えないけど、

先生が生まれ育った街を見に行こう。

前田先生が

生まれ育った街を。

今より少しだけ

先生の近くに。

先生の故郷。

朝8時半過ぎの駅は、通勤・通学の人々で溢れていた。誰もが急ぎ足で行き交う駅構内を、縫うように歩く。

2日分ほどの着替えを詰め込んだ小さめのキャリーバッグを引きながら、新幹線の切符売り場へと向かう。

時刻表を確認し、9：00発、東京行き自由席の切符を買った。自動改札機の前で和晃のことが頭を過ぎり、一瞬、足が止まった。しかし、すぐ後ろに人の気配を感じて、改札機に切符を入れた。

電光掲示板でのりばを確認して、エスカレーターでホームに上がる。新幹線のホームは、在来線とは違い、旅行や出張を思わせるような荷物を持った人が多く、自由席ののりばに並ぶ人の列に、自分も紛れた。

昨夜のことを考えていた。

和晃には、一年以上も前から、ネット上に心の拠り所となる相手があった。

女で、文面からしてまだ若いコだろう。

1年前なら、私はまだ真っ直ぐに和晃だけを想い、和晃に尽くしていた。

和晃はどうして、そんな相手を作ったのだろう。

私に不足している部分があったから・・・？

どんなに身の周りの世話をしても、私は和晃の心までは癒してあげられていなかった。

いつも必至に尽くしていたにも関わらず。
私は一体何をしていたのだろう。
和晃の何を見てきたのだろう。

新幹線がホームに入ってくる。

2号車の窓側の席に座った。

隣には、30代くらいの女性が座ってきた。

椅子に深く腰掛け、外を眺めた。

朝の日差しがゆるやかに車内を明るくしている。

バッグの中で、携帯電話のバイブレーションの音がする。

多分、和晃だ。

音が鳴り止むのを待ってから、携帯を開いた。

10分置きに、もう3回も、着信が残っている。

私がいなくなっていることに、和晃は慌てただろうか。

実家に連絡されて、親に余計な心配をかけたくない。

メールだけ、送っておくことにした。

『2〜3日出ます。少し1人で考えたいこともあるから。実家では
ありません。親には心配かけたくないの、連絡したりしないで。』

新幹線がゆつくりと動き出す。

流れる景色を見ていると、また携帯のバイブレーション。

『はるか、今どこにいるの？』

俺のせいで、はるかをひどく傷つけたこと、本当に深く反省して
います。

謝っても、謝りきれない。

ずっと、はるかを騙していたようなかたちで、こんなこと言える立
場じゃないけど、でもこれだけは信じて欲しい。

本当に愛しているのははるかだけ。

はるかにはこれからもずっと、おれの傍にいてほしい。

はるかの信頼を取り戻すためならどんな償いでもする。

これから仕事に行きます。

帰って来てくれるのを待っています。』

携帯を閉じて、バッグへしまう。

また、外を眺める。

昨夜に比べたら、なんて穏やかな時間だろう。窓の外は、よく晴れた清々しい景色が次々と流れ、新幹線の揺れ動く音と、時々聞こえる車内アナウンス。隣の女性が読んでいる単行本のページが捲られる音。

まぶたが重くなり、目を閉じた。

シートの揺れに身を任せ、しばらく眠った。

神戸・・・どんな街だろう・・・

「・・・ろしま、ひろしまです。降り口、右側です」

広島駅に到着するアナウンスで目が覚めた。

1時間ほど眠っていただろうか。

ぼんやりとしながら携帯を見ると、10時を回ったところだ。

また、メールが届いている。

和晃かと思いきや、麻耶ちゃんからだ。

『おつはよーはるちゃん！来週からゴールデンウィークやなあ。はるちゃんは何か予定あるん？』

神戸に向かう新幹線に乗っていることを知らせた。

麻耶ちゃんは、絶対に驚いて電話してくるだろう。

新神戸駅のホームに降り立ち、深く息を吸った。

神戸に来た。

前田先生がいる神戸。

先生の生まれ育った街、神戸。

改札を出ると、思っていたほど駅の中に人が多くないのが意外だった。

静かな駅構内を歩き、土産物なども取り扱っている広めの売店で「神戸」と大きく書かれたガイドブックを買った。

右も左もわからない。

売店の前に並んでいるベンチに座り、ガイドブックを開く。

別冊で付いているエリアマップを外し、1ページ目を見る。

オーブンしたばかりなのか、JR三ノ宮駅前のランドマークが観光の目玉として大きく取り上げられている。その下に順に、三宮、北野、元町、旧居留地、メリケンパーク、ハーバーランド・・・市内交通で足を延ばせば、舞子という場所で明石海峡大橋も見られる。

とりあえず、泊まることを決めておくことにした。

ガイドブックの後半に、「おすすめホテル一覧」があり、新神戸駅と三宮のちょうど中間地点にある、1泊5千円弱で泊まれるホテルを見つけた。

携帯を開き、ホテルの電話番号を見ていると、麻耶ちゃんから電話が掛かってきた。

「もしもし？」

「はるちゃん？今どこ！？」

「アハハ・・麻耶ちゃん、仕事じゃないの？」

「今からお昼やに。それよりどこにおんの？」

「新神戸駅。さっき着いたの」

「着いたのって・・どうしたん急に？」

「・・・うん・・ちよつと、和晃といろいろあつて、家出てきたの」

「いろいろつて？」

「ー・・・ん、まあ、いろいろ」

「・・・」

「行くところなくて・・それなら、神戸の街を見に行こうかなって思
い立って・・」

「1人で来とんの？」

「うん」

「・・・わかった。ほんだら、ウチも行くわ」

「えっ！？」

「はるちゃん、1人じゃ心配やし、はるちゃんにも会いたいしな。」

「え、いいよそんなっ」

「ウチ、明日から連休やでさあ、今日の夕方、仕事終わったらすぐ
出るわ」

「え、でも・・」

「ええのんよ。ウチも久しぶりに神戸行きたいわあ。電車乗り継いで3時間くらいかかんねんけど、そうやなあ・・・5時・・6時・・7時・・8時（20時）半くらいには三ノ宮駅に行けると思うでさ、
また電話するわあ」

「・・・うん・・わかった・・」

「ほな、あとでな」

「うん・・・」

麻耶ちゃんの気持ちが嬉しかった。

前田先生のいる街とは言っても、知らない場所に自分1人。
心細くないと言えば嘘になる。

麻耶ちゃんに、和晃のことを聞いてもらおう・・・

ホテルに電話をして、ツインの部屋を、とりあえず1泊で予約した。
地下鉄山手線で、まずは三宮へ向かう。

地下鉄を降りて、案内表示板をたどりながら歩いていく。迷路のよ
うな地下街を通り抜け、JR三ノ宮駅前の歩道橋を渡り、地図で見
るところの「神戸国際会館」に入った。

時計は12時を過ぎている。

とにかくどこか落ち着ける場所で、麻耶ちゃんが来るまでどうする
か考えよう。

エレベーターで11階へ上がる。

吹き抜けになり、ガラス越しに庭園の見渡せるおしゃれなカフェレ
ストランに入った。

ランチを注文して、運ばれてきた水を半分飲んだ。

青空の下、整えられたビルの屋上の庭園がキラキラしている。

しばらくぼんやり眺めた。

和晃は、私が神戸にしていると知ったらどのくらい驚くだろう・・・。

前田先生は、この街のどこにいるんだろう・・・。

服のポケットから、先生にもらったストラップを取り出して、携帯
電話に結びつけた。

前田先生・・・

「お待たせしました」とホールサービスの女性がランチプレートを運んできた。

女性がガイドブックに目をやり、少し笑顔を向けながら尋ねた。

「ご旅行ですか？」

「あ・・はい・・」

ちよつと・・違う気もするけど

「そうですか。いい街ですよ、ここは」

「・・・はい」

「楽しんでいってくださいね」

「はい・・ありがとうございます」

サラダを食べながら、ガイドブックとエリアマップを開く。

三宮って・・・駅だけで一体いくつあるの・・？混乱しちゃいそう

ランチを済ませてから、神戸国際会館を跡にした。

ホテルに荷物を預けてから、ホテルから近い「北野」を観て回り、「生田神社」に寄ってから、麻耶ちゃんが着くころに三宮へ戻るところにした。

バッグとエリアマップを持ち、「北野」という町を歩く。

傾斜のある坂をゆつくりと登って行くと、様々な洋風建築が見られる。観光スポットではあるが、閑散としていて静かな町だ。

「風見鶏の館」という異人館の前に来ると、円を描くように並んだベンチがある広場があり、そこから少しだけ神戸港が見渡せるようになっていいる。さらにその上へ登ると、「北野天満神社」があり、小さな展望台からはポートタワーが見えた。

空はよく晴れている。

昨夜のことなど嘘のように、気分が清々しい。

自分の悩みなどちっぽけで、それほど大したことではないように思えた。

神戸を選んでよかった・・・

「生田神社」は、源平合戦の舞台となった生田の森に囲まれていて、縁結びやスポーツ必勝祈願で有名だと、ガイドに書かれている。

縁結び・・・

和晃と付き合って2年目の元旦、地元の縁結びで有名な神社に初詣をした。結婚が決まった時は、ご利益があつたと2人で喜んだ。和晃は今、何を思っているだろう・・・

・
どんなかたちであれ、もう一度、平穏な日々を取り戻せますように・

参拝を済ませて、生田神社を跡にした。

19時を過ぎて、麻耶ちゃんから電話が掛かってきた。

「もしもし？」

『はるちゃん？今どこ？』

「今？三宮だよ。どこって言うと、ちょっと説明できないけど・・・」

『あ、ホンマ？ウチな、予定より早く着きそうなんさ』

「え？そうなの？じゃあ、今から行くよ。JRの三ノ宮駅でいいんでしょ？」

『うん。中央改札付近で待ってとってくれる？』

「わかった」

エリアマップで自分の位置を確認してから、ＪＲ三ノ宮駅を目指す。夜の三宮の街は、昼間にも負けない賑やかな雰囲気、キラキラするネオンの下には、それぞれのナイトライフがある。

街を歩いていると、時折目に留まる「歯科」や「デンタルクリニック」の文字。

見つけるたびに立ち止まる。

前田先生が働いているのではないかと、淡い期待を抱いてしまう。けれどもすぐに、虚しいため息をついて、また歩き出す。

先生を探し出すことなど、不可能だ。

ＪＲ三ノ宮駅・中央改札の前まで来ると、すぐに背後から呼ばれた。
「はるちゃん！」

振り返ると、２年ぶりに見る麻耶ちゃんがいた。

「麻耶ちゃんっ」

「あゝはるちゃん、久しぶりやなあ」

麻耶ちゃんは私の手を握り、懐かしむように笑顔を向ける。

麻耶ちゃんは、結婚式で会った２年前より、また少し大人っぽく、キレイになった。

「ごめんね麻耶ちゃん、こんなところまで・・・」

「ええのんよ」。ウチが勝手に来たんやし。それよりお腹空いたわ。ごはん食べよ」

「うんっ」

駅前のランドマークの８階にある、和食居酒屋に入った。

「ウチ、神戸久々来てんけど、ここ（ランドマーク）は初めてやわ」「オープンして間もないみたいだよ」

「今日は１人で何しとったん？」

「ん？えーとね、北野っていうところ回って・・・生田神社にも行ってきたよ。センター街をぶらぶらしようかなって思ってたら、麻耶ち

やんから電話が来て・・・」

「そつか。ほな、この後センター街行こか」

「うん」

飲み物が運ばれ、乾杯をする。

「ほな、久しぶりの再会やなっ。かんぱーい」

「かんぱい」

ビールを一口飲んだ麻耶ちゃんが、すかさず私に尋ねる。

「で、何があつたん？旦那と」

「・・・うん・・・」

昨夜のことを、麻耶ちゃんに話す。

麻耶ちゃんは、初めは少し驚いたような表情で、その後は少し淋しげな目で頷いていた。

「はるちゃんの旦那・・・そんなことするような人じゃなかったのにな・・・」

「うん・・・私もそう思ってた・・・でもね、私も和晃と同じことしてたし・・・」

「・・・先生のことか」

「うん。だからこんなところまで来ちゃったんだけど・・・和晃を責める資格なんてホントはないのに、いっぱい責めて、家出までしちゃった」

「・・・先生に、躊躇わんと、気持ち伝えといたらよかったなっ」
麻耶ちゃんは、悲しそうな笑顔で言った。

「アハハ・・・そうかな」

明るく賑やかな三宮センター街を、麻耶ちゃんと2人で歩く。

たくさんのお店が立ち並ぶ中、ラグビー用品専門の店の前で足が止まった。

「おっ、ラグビーの店やなあ。」

「うん・・・」

「神戸はラグビーチームもあるしな。ちょっと入ってみる？」

「いいの？」

「ええよ」。はるちゃんの行きたい所は全部行こな」

麻耶ちゃんに背中を押され、少し躊躇しながら中へ入っていく。

店内には、ラグビーボール、ヘッドキャップ、スパイク、ジャージ・ラグビーで使用するものが所狭しと並び、壁にはトップリーグの選手たちのポスターが貼られている。

先生も・・・こんな所に買いに来たりしたのかなあ・・・

レジの横に、歯科クリニックのリーフレットが置いてあり、思わず手に取った。「スポーツ歯科・マウスガードは当院へ」と書かれている。

ふつと笑いながらリーフレットを戻そうとすると、その横に、見覚えのあるストラップが並んでいる。

あ・・・これ・・・

バッグから携帯を取り出す。

同じ・・・

先生からもらったストラップと同じ製品が色とりどりの種類で並んでいる。

「それ？先生からもらったんは」

麻耶ちゃんが後ろから聞く。

「うん・・・」

すると、レジにいた若い男性店員も、同じことを聞いてきた。

「あ、それ、誰かにもらったんですか？」

「・・・え？」

「それ、うちの会社のオリジナルなんです。東京と大阪、あそここの3店舗でしか取り扱ってないんですよ。まあ、ネットでも買えるんですけどねっ」

ネット・・・

「どなたかとお揃いですか？」

店員がいたずらっぽい笑顔で言う。

「え？」

「これ、2つペアでしか売ってないんです。ほらね」

店員が、売り物のストラップを1つ手に取って見せた。

！・・・！

「このへんでは、地元の大学生とかが、彼女とお揃いで持っていたりしてて、ラガーマンの間ではちょっとした人気アイテムなんですよ」

じゃあ・・・

それじゃあ・・・もう1つは・・・

「・・・はるちゃんっ・・・」

後ろで話を聞いていた麻耶ちゃんが、私の肩にそっと手を置いた。

ずっと知りたかった ストラップの意味。

ずっと先生に会いたかった。

でも 会えなかった。

先生の影を追ってやって来た神戸で

探し求めた意味を見つけた。

先生

先生

前田先生

会えなくても

繋がっていた。

答えはこれで

合っていますか？

いつまでも先生。

洸々と赤く輝くポートタワーの下。

中突堤中央ターミナルに続く階段に、麻耶ちゃんと2人、並んで座り、ネオン溢れる神戸港を眺めていた。

ストラップの付いた携帯を握りしめ、遠くを見ている私の横に、麻耶ちゃんは何も言わず、ただ寄り添ってくれていた。

ペアでしか買うことの出来ないストラップ。

そのうち1つだけを、先生は私にくれた。

神戸に来なければ、わからないままだった事実。

「もう1つ・・・」

「・・・ん？」

口を開いた私に、麻耶ちゃんは優しく頷く。

「もう1つは・・・先生が持つてるのかな・・・」

「・・・うん・・・。きつと、先生が持つてると思うわ」

「・・・」

「そう思ってもええんちゃう？」

「・・・」

「はるちゃん・・・ウチ・・・」

「・・・ん？」

「ウチな、先生は、はるちゃんのこと好きやったと思うわ」

「・・・」

「何も言わんと、おらんようになってもうたんは、きつと、はるちゃんが結婚しとんの知ってて、はるちゃんには旦那と幸せになって欲しかったんかも」

神戸港が 涙で滲んでいく

「……………」

「はるちゃんの幸せ、いつまでも願ってるっていう意味なんちゃうかなあ……」

「……………」

「もう、先生の気持ちは確かめられへんけど、そう思っとなんかええんやない？」

「……………」

「そう思うことにしなや……はるちゃん……」

「……………いいのかな……」

麻耶ちゃんは、私の肩に手を回し、微笑んでいる。

「ウチが……はるちゃんの想い……しっかり覚えといたるわ」

「……………うん……」

前田先生

先生が好きです

先生に会いたいです

でも もう、

気持ちを伝えることも

会うことも出来ない

それでも

先生を想っています

先生の声

先生の眼差し

先生の手のぬくもり

先生のおい

先生の笑顔

先生の優しさ

これからもずっと

前田先生が好き

会えなくても

先生の幸せを願っています

先生

今、どこですか？

先生がいる場所から

ポートタワーは見えますか？

「部屋、ツインで取ってくれたん？」

「うん」

「助かるわあ。泊まるとこまで考えてなかったんやわ」

「突然だったしね・・・」

加納町という標識のある道を、ホテルへ向かって歩く。

「部屋で、またお酒でも飲もか!？」

「・・・あ、麻耶ちゃん私・・・」

「ん？」

「和晃と・・・話してみる・・・」

「I・・・うん・・・」

「・・・ちゃんと話して・・・明日・・・帰る」

「ほんまに大丈夫？」

「I・・・うん」

「わかった。ほんだら、ウチ、部屋で待ってるわ」

「ごめんね」

「ええよ、気にせんとって」

ホテルから、少し離れたところにある長い歩道橋に上り、携帯電話を開いた。

22時半。店のラストオーダーは過ぎている。

心臓がドキドキ鳴るのを感じながら、和晃に電話を掛けた。

仕事中和晃に電話をしたことは殆どない。
どうせ、忙しいときは出てくれない。
今までは、そうだった。

5回ほど呼び出し音が鳴った後、和晃が出た。

『もしもしっ』

「ー・・・もしもし」

『・・・うん』

「ごめん、まだ忙しかった？」

『いや、いいんだ』

「・・・明日、帰るから」

『・・・ホントに?』

「うん」

『よかった・・・心配してたんだ』

「・・・」

『今・・・どこにいるの?』

「・・・神戸」

『ええっ!?!』

「ぷっ」

和晃の驚きっぷりに、思わず吹き出してしまった。

『こっ神戸って・・・兵庫県?』

「うん」

『そりやまた・・・随分遠くまで・・・』

「前から、一度行ってみたかったから、今朝の早い新幹線で来たの」

『そつか・・・』

「麻耶ちゃんも一緒だから、心配なくていいよ」

『三重の?』

「うん」

『そつか・・・だったら安心だな・・・』

「うん」

『気をつけて・・・帰ってくるんだよ』

「うん」

『待ってるから』

「・・・じゃあね」

『あ』

「・・・なに？」

『何時くらいに着きそう？』

「まだわからない。新幹線に乗る前にメールしとく」

『うん・・・わかった』

「じゃあね」

『じゃあ・・・』

電話を切って、携帯を閉じる。

「ハア・・・」

歩道橋の手すりに肘を寄せ、車の流れを見ていた。

携帯に揺れる、ラグビーボール。

和晃を

許そうと思った。

許す心を

持ちたいと思った。

和晃ばかりを責められない自分がいる。

前田先生を好きな自分。

麻耶ちゃんが言ったように、前田先生がもし、私を想ってくれていたらとして、それゆえに何も言わずにいなくなったのなら、私は和晃

と幸せにならなければいけない。

前田先生を

好きだからこそ。

和晃と生きていこう。

和晃と幸せになる努力をしよう。

和晃を

愛していこう。

先生への想いを

胸にしまつて。

朝食を済ませてから、チェックアウトしたのは10時を少し回った頃だった。

昨夜は、麻耶ちゃんの彼氏の話を聞きながら、結局深夜まで飲み続け、麻耶ちゃんはいどい二日酔いだった。

「うっー・・・歩くと頭に響くわあ」

「麻耶ちゃんだいぶ飲んでたもん。目が腫れてるよ」

「あぁーそれ、言わんどってええ。朝、鏡で自分の顔見てびっくりしてもうたわ」

ガラガラガラガラガラ

「んん〜キャリーのキャスターがうるっさいわあ」

「あはは。私が麻耶ちゃんの分も引いてあげるよ。貸して」

「いやいや、ええのんよお」

最後にもう一度ポートタワーを見ようと、メリケンパークを目指した。

中突堤の広場では、賑やかにフリーマーケットが開かれていた。それを眺めるように、中突堤中央ターミナルの横の階段に座った。

「大丈夫？麻耶ちゃん」

「んー．．大丈夫やに」

「さすがにフェリーに乗るのは無理だね」

「うわあ勘弁してえ．．吐いてまうわ」

「あはは」

深い青空によく映えた、赤いポートタワーを見上げる。

正面にはキラキラと輝く海。

「本当に、素敵な街だね」

「．．．来てよかったなっ、はるちゃん」

「うん」

「うん。はるちゃんが元気になって、ウチも嬉しいわあ」

「．．．ありがとう。麻耶ちゃん」

「ふふっ、ええのんよお」

前田先生に出会わなければ、来ることはなかったかもしれない。

「よしっ！じゃあ、最後は、中華街で食べ歩きして帰ろな」

「え？大丈夫？食べられるのお？」

「当たり前やわ。せつかく来てんから、吐いてでも食べて帰ったるわ」

「ははつ。でも、中華街は確かに見て帰りたいな」

「そやな。はるちゃん、中華の調理師やってんもんな」

「うん・・・」

「旦那にお土産買ってたらええやん」

「うん」

キャリアバッグを持ち、歩き出す。

ポータワーを振り返り、目に焼き付ける。

ここは前田先生が住む街。

でも、先生との思い出は、自分が暮らす街にしかない。

帰ろう。

自分の街へ。

「はるちゃん？行くで」

「あ、うん」

19：10 新神戸発・博多行きの新幹線に乗った。

外は暗く、景色はもう見えない。

シートに揺られながら、神戸のガイドブックを開いた。

あ・・・明石海峡大橋・・・見に行けなかったな・・・

今度は和晃と行こう。

中華街は、和晃も楽しめるにちがいない。

帰りは2時間40分かった。

人の疎らなホームに降り立ち、キャリーバッグを引く。

駅からバスに乗るのも、疲れた体にはいささか面倒に感じ、タクシーで帰ろうと考えながら改札を出た。

3、4歩、歩いて、足が止まった。

改札口の前に、和晃が立っていた。

真剣な顔で、私を真っ直ぐ見ている。

周りを歩いている人の足音、話し声、全ての雑踏が消音になる。

ゆっくりと、和晃の前へと歩く。

「・・・おかえり」

パンッ

乾いた音に、近くを歩いていた人が振り返る。

和晃の左頬を、右手で叩いた。

「……………」

和晃は、それでもなお、私の目から視線をずらさない。真っ直ぐに、私を見ている。

「・・・和晃のしたことは、私にとっては浮気と同じ」
「・・・うん」

「仮想でも、恋愛してたって言ったでしょう？」

「・・・うん」

「・・・私との結婚生活で、浮気はこれっきりにして」

「・・・はい」

「・・・次は許さないから」

「・・・はい」

和晃が、目に涙を滲ませている。

「うん・・・じゃあ、もういいよ」

和晃に笑顔を向けた。

と、同時に、右腕を引かれ、和晃の胸に抱き寄せられた。
和晃は私を強く抱きしめ、小さく震えながら泣いていた。

「ふふっ・・・どうして和晃が泣くの？」

「・・・」

和晃の背中に手を回し、ポンポンと優しくたたいた。

時折、改札を出た人が、じろじろと横目で見ながら通り過ぎていく。

「帰ろ？和晃」

和晃の、涙で濡れた顔を手で拭う。

「仕事は？」

「・・・早番、代わってもらった」

「早番？」

「うん・・・いつもは・・・俺は料理長だから早番なんてないんだけど・
・他の社員は早番あるから・・・今日だけ・・・」

「そう」

駅を出て、和晃が車を置いたという駐車場まで歩く。
書店やコンビニが立ち並び通りを進むと、聞き覚えのある曲が流れている。

すぐそのCDショップからだ。

忘れもしない。

前田先生と2人で行ったラグビーの試合。

帰りの車内で流れていたDelta Goodremの曲だ。

「また、春に会おうね。はるかさん」

前田先生の笑顔がよみがえる。

「はるか？」

和晃が私を呼ぶ。

「ん？」

「大丈夫？」

「・・・うん」

先生

先生

前田先生

いつまでも

先生が好きです

会えなくても

いつまでもずっと。

いつまでも先生。（後書き）

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。
感想など、短いコメントでも頂ければ幸いです。
続編もよろしく願います。

- この物語を、歯科医師M・S氏に捧ぐ -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5174d/>

先生。

2010年10月12日03時27分発行